日本国際情報学会誌
2018年度
ＩＳＳＮ１８８４－２１７８

国際情報研究

通巻　15号
日本国際情報学会

（目　次）

発刊の言葉 ---------- 1

巻頭言 ---------- 2

研究論文
審査論文：Original

Underlying Relationships between Business and Political Speeches: Analysis of Conceptual Structures from a Macro Perspective
SHIMIZU Toshihiro ---------- 3

変化するラーメン像
-ラーメンにおける「中華」と「和」のイメージの変遷-
増子　保志 ---------- 12

J・ヒックの宗教的多元主義における問題についての一考察
南部　千代里 ---------- 24

「よいgood」の分析について
―ヘアの理論の批判的検討―
磯部　笑子 ---------- 35

新人看護職員の早期離職理由
―心理的プロセスの検討―
柏田　三千代 ---------- 46

日本国際情報学会誌規程 ---------- 55

編集後記 ---------- 59

発刊の言葉

日本国際情報学会　会長　近藤大博

社会科学は、その研究の歴史において、多くの先達の知恵と経験を蓄積させ現在があります。たしかに知識の積重ねと経験に支えられた研究は重要です。それらの蓄積が各学問の礎としてあります。

しかし、今日、国際化・グローバル化の波は、各学問の境界・領域・枠をいとも容易に乗り越えます。各学問の境界・領域・枠を乗り越えたかたちで、新たな問題が生じています。

各研究者は、従来の礎・専門領域に拘泥していては、新時代に、新たな問題に、対処・対応できません。

また、グローバル化は、国境を超えての研究協力、積極的な情報の受発信の機会をもたらしました。この機会を大いに活用すべきです。縦横に協働研究すべきです。研究成果を共有すべきです。

今日の社会的・公共的問題は、知識・学問と社会・政治の境目にあります。さらには従来の学問体系では対処不能・対応不能となっています。解決するためには、学際的な集団の確立と学際的な取り組み、ひいては学際的な理論的枠組みが必要となります。

つまり、21 世紀の現在、社会学・経済学・歴史学・心理学・哲学等々の専門領域・枠を超えた協働研究が必要不可欠となってきているのです。

既存の考え方・方法論、既存の専門分野にとらわれることなく、幅広く研究テーマを募りたいと存じます。学際的な研究に積極的に発表の機会を与えたいと存じます。多くの方々が斬新的で視点の違う研究を競い合う場を設定したいと存じます。

日本国際情報学会は、上のような思いを密かに胸に、2002 年 3 月に設立されました。

このたび、会員の研究を促進すべく、活動の成果を公表・公開すべく、学会誌発行を企画しました。本誌がその創刊号です。

今回発刊にあたり、多くの方々から、ご指導、ご支援を賜りました。厚く御礼申し上げます。

本誌が、広く世に迎えられ、新しい社会の創造に多少なりとも寄与できますよう、さらに学問の垣根が取り払われた研究の場として数多くの研究者に活用していただきますよう、祈念いたします。

2004 年 5 月 10 日

当学会の目的の一つは、日本語で思索する全世界の同学のフォーラムを形成することです。その目的達成のためにも、従来の機関誌『国際情報研究』を刷新し、『日本国際情報学会誌』としました。新しく編集実務を担当することになった編集委員会の諸兄の尽力あってのことです。

全世界に読者を求めるため、インターネットにて公開発行いたします。もちろん、ダウンロードしてプリントアウトすれば、通常の紙媒体の冊子と同様になります。活用願います。なお、学会論文の質の向上を目指すため査読の方式をも、今号をもって改めました。詳しくは、「投稿論文の査読について」をご覧ください。

当学会の会員層は産学官に属する人材で形成され、その研究テーマは総合社会情報研究を中心に幅の広いジャンルを網羅しており、新たな学術的価値創造を可能にしています。今後、会員間のコミュニケーションをより充実させ、社会に貢献する学会活動を目指したいと存じ上げますので、よろしくご協力をお願い申し上げます。

2008 年 12 月 5 日

巻頭言

新たな学問探究の根源を求めて

佐々木　健

この秋、『ポルトの恋人たち』と題する映画（日葡米の共同制作）が公開された。物語の舞台は、18世紀のポルトガル、そして21世紀の日本。一方は、1755年11月1日のリスボン地震のあとの事態を、もう一方は、2011年の3・11以後の状況を想定しているという。封切りの報に接しての連想から、以下に、切れ切れの思いを、・・・・・・

リスボンの大地震ということで、以前この「巻頭言」(2016)で触れたことのある18世紀スコットランドの思想家、アダム・スミスの言葉を想起します。主著の一つ、Theory of Moral Sentiments の一節です。

「中国という大帝国が、その無数の住民すべてとともに、突然地震によって飲み込まれたと想定してみよう。そして、ヨーロッパにいる人間愛のある人物で、世界のなかのこの地域とどんな繋がりももたい者が、この恐ろしい災厄についての情報を受け取ったとき、どんな感情の動きをするかを考えてみよう。

私が想像するところ、この人物は、何よりもまず、あの不幸な国民の非運に対して悲哀をとても強く表すであろうし、人間の生活・人生の不安定さ、そして一瞬にして壊滅しうる人間の一切の労働のむなしさについて、多くの憂鬱な省察を行うであろう。

彼はまた、もし理論的思索をこととする人であるならば、たぶん、この大災難がヨーロッパの商業と世界全体の事業や営業にもたらすかもしれない様々な影響について多くの推論を行うであろう。この精緻な、哲学的と称する学問的推論がすべて終了したとき、そして、これらの人間的感情とこれに基づく判断とがひとたび見事に表現されるとき、彼は、そうした出来事が何も起こらなかったかのように、以前と同じような気楽さと平穏さで、自分の仕事や余興・趣味を追求し、休息をとったり気晴らしをしたりするであろう。」

（水田洋訳『道徳感情論』（上）岩波文庫、p.313。引用に当たり適宜改行。引用の訳文は筆者の私訳）

遥かかなたのアジアの大国で、云々と、スミスは語り始める。彼がリスボン地震を念頭に置いていることは明白。同時に、彼が崇敬するフランスの思想家が、大災害の事態に直面して「リスボンの震災についての詩」（1755）を発表していることも、そして何より、『カンディード』（1759）と題する小説の著者でもあるこの人物が批判の矛先をどこに向けているかも十分に理解している。彼は、ポルトガル大震災とこれに関わる思想・世界観上の原理問題に直接論及しなければならない局面を、ここでは回避するために、このような議論の立て方と進め方を設定している。

他者の幸福を慮る「人間愛」の感情が具わっていても、「想像力」が十分に陶冶されていない場合、通常の人間は、無縁の、関りのない他人に対して、あるいは空間的・時間的に遠隔にある者に関して、通り一遍の憐憫・歓喜は表しても、その苦しみ・喜びを自分の苦しみ・喜びとして引き受けることは至難である。また、学問的訓練を受けた者でも、事態の根源をめぐる認識は、その専門的学問の在り方によって、その対象領域の限定された特殊的な性質に応じて、部分的な認識となり、問題の全体的脈略と発生基盤とから切り離されてしまうことも生起しうる。

大震災によって、世界と人間存在との根幹に関わる、人間とは何か、人生とは何かという本源的な問いが、突きつけられている。学問は、自己の置かれている世界・人生・学問の基盤から疎遠になるとき、bodenlos なものとなる。この難局にどのように対処するか。スミスの問いかけ、そして私たち自身に今課せられた課題である。

研究論文

（審査論文：Original）

審査論文はＪ－ＳＴＡＧＥからも閲覧できます。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/gscs/-char/ja/

Underlying Relationships between Business and Political Speeches: Analysis of Conceptual Structures from a Macro Perspective

SHIMIZU Toshihiro
Department of English, School of Letters, Mukogawa Women's University

ビジネススピーチと政治スピーチの背後関係：マクロ的視点に基づく概念構造の分析

清水　利宏
武庫川女子大学　文学部　英語文化学科

本研究は、ビジネス英語スピーチと政治スピーチの背後にある関連性について、時系列的な比喩構造をヒントにマクロ的視点から分析を試みるものである。2005～2015 年に発表された 110 本のビジネススピーチを分析した先行研究の成果を、11 年という長期的な時間軸で俯瞰的に分析することで、ビジネススピーチと政治スピーチの隠れた関連性を明らかにしていく。まず、11 年間・110 本のビジネススピーチを分析した先行研究の論点を整理し、メタファグラム分析によって示された「概念構造を特徴づける５つの支配性パターン」のデータを整える。そして 11 年間分の支配性構造のデータについて、(1)視覚的なグラフ分析、(2)相関性の統計分析、(3)時系列を反映した自己相関分析を施すことで、マクロ的かつ複眼的な観点からビジネススピーチと政治スピーチの関りを調査する。これらの分析の結果、(1)大統領選挙の時期にビジネススピーチの概念構造に特異な変化が見られること、(2)2005～2015 年に大統領であったブッシュとオバマ両氏の特徴的な概念構造と、ビジネスに特徴的な概念構造に逆の相関がみられること、(3)ビジネス特有の概念構造には(大統領の 2 期の任期と同じ)8 年間の周期性が認められることが明らかになった。

I　Introduction

The primary aim of this study is to demonstrate and examine the underlying relationships between business and political speeches by analyzing long-term, chronological trends of metaphors in business speeches. In the process, metaphorgram analysis (Shimizu, 2010) is applied, which depicts the chronological variations of conceptual metaphors (Lakoff & Johnson, 1980). Through an extensive corpus-based analysis of 110 business executive speeches delivered in 11 years, it was proved that there are five "dominance patterns" of metaphorical structures (Shimizu, 2017). This article, therefore, further investigates what chronological features are revealed if these 11 years are observed from a macro point of view. At the same time, chronological trends of the five dominance patterns are discussed and compared with the political backgrounds of the times.

Since Aristotle's era, metaphors have played essential roles in speech communication. Metaphorical expressions are linguistic instances of the concepts as Lakoff (2008) explains that "just living an everyday life gives you the experience and suitable brain activations to give rise to a huge system of the same primary metaphorical mappings that are learned around the world without awareness" (p. 26). Such concepts behind words can be clues to what the speakers are thinking and believing deep in their hearts. Especially in the field of business communication, "good metaphors can create new understanding and uplift an audience" (McKerrow, Gronbeck, Ehninger, & Monroe, 2000, p. 235), while Clancy (1989) points out that "a poor metaphor applied to business can have enormously harmful effects when actions are based on a mistaken analogy" (p. 27). These statements highlight the importance of utilizing and analyzing metaphors in business speeches.

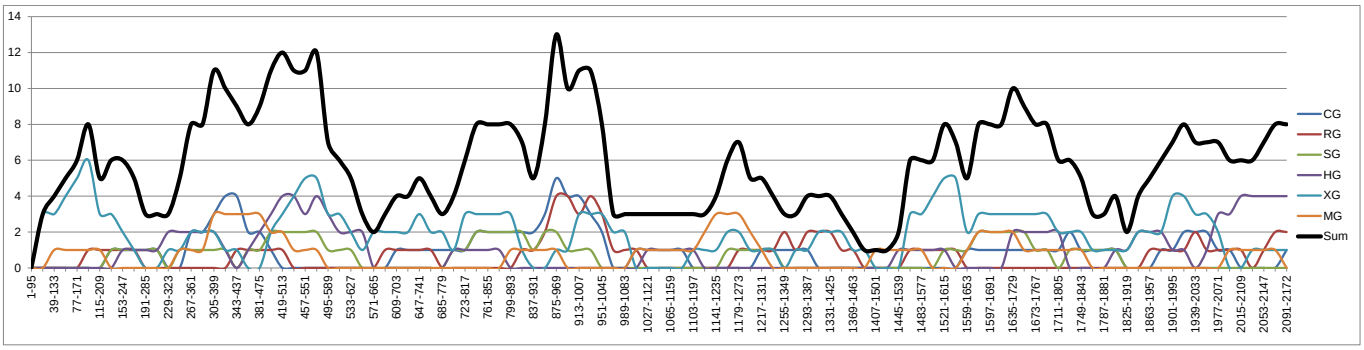


Fig. 1 Sample metaphorgram: from Shimizu (2014, p. 63)

In the analysis of metaphors in business communication, Koller (2008) demonstrated a chronological way to perceive the roles of metaphors. A chronological point of view becomes even more crucial in analyzing metaphors in speeches, which are made on a single chronological timeline. This is why Shimizu proposed a metaphorgram analysis in 2010 that enables the chronological analysis of metaphors appearing in speeches. As summarized by Shimizu (2017), an extensive metaphorgram analysis of 110 business speeches was completed. In the study, however, one intriguing possibility for observation was left unexplored: the analysis of these 110 business speeches over 11 years from a broader, long-term point of view.

This article consists of five sections. Following the introduction, Section II provides an overview of the research procedure and the significant results in the preceding study (Shimizu, 2017). The results are graphically displayed in Section III. This section conducts a deeper analysis of the business and political characteristics embedded in the visual trends in the graph from a statistical point of view. The results are discussed in Section IV, which leads to the conclusion in Section V. Through this study, it is expected that the long-term trends will provide new clues to understand the underlying relationships between business and political backgrounds of the times.

II Review: Extensive Metaphorgram Analysis of 110 Business Executive Speeches

2.1 Basic procedure

A metaphorgram analysis is designed to study the chronological features behind the timeline. As displayed in Fig. 1, each metaphorgram, yielded in the analytical process, is a visual representation of chronological variations of different groups of conceptual metaphors in the speech. As explained by Shimizu (2017, p. 5), the extensive metaphorgram analyses followed the procedure below.

1) Corpus listing

A business executive speech (BES) corpus and a political presidential speech (PPS) corpus were created. The corpus listings of BES 2005-2009 are shown in Shimizu (2015, pp. 110-112), BES 2010 in Shimizu (2014, p. 58), and BES 2011-2015 in Shimizu (2017, pp. 10-11). PPS Bush contains ten speeches by George W. Bush, and PPS Obama contains ten speeches by Barack Obama. The corpus listings of PPS Bush and PPS Obama are shown in Shimizu (2016, p. 12).

2) Automated concordancing

Metaphorical expressions in the texts were mechanically tagged in the original texts based on the metaphor search-word list (Shimizu, 2014, pp. 59-60). These

tagged words are called "metaphor candidates[1)]."

3) Manual verification

The metaphor candidates were manually verified to check their metaphoricity. Once they were verified as metaphors, they finally became "metaphor keywords."

4) Grouping of conceptual metaphors

The metaphor keywords were categorized into these six conceptual metaphor groups.

*** Six conceptual metaphor groups** (CMGs)

1) Competition-related CMG: <CG>, such as GAME [2)], WAR, SPORTS, DEBATE, etc.
2) Relation-related CMG: <RG>, such as ROMANCE, MATING, RELATIONSHIP, FRIENDSHIP, COUPLE, CONNECTION, etc.
3) Structure-related CMG: <SG>, such as BUILDING, FACTORY, PLANT, CONTAINER, SUBSTANCE, MACHINE, etc.
4) Human-related CMG: <HG>, such as HEALTH, FOOD, BODY, FEELING, BODILY ACTION, etc.
5) Experience-related CMG: <XG>, such as JOURNEY, ADVENTURE, HARDSHIP, ARTISTIC ACTIVITY, etc.
6) Moving-force-related CMG: <MG>, such as PHYSICAL FORCE, CAR, SHIP, HORSE, TRAIN, AIRPLANE, etc.

5) Concordancing

The tagged texts were set on a concordancing software, WordSmith Tools (Scott, 2008), to obtain the numerical data about the texts.

6) Data processing

The numerical data were processed, using original computer software, T-Scope (Shimizu & Shimokura, 2010) to yield metaphorgrams. The original concept of "Scope & Step" (pp. 332-334) was introduced into this quantification process.[3)]

2.2 Five agreement patterns of three dominant factors

Through the analyses of 110 speeches, Shimizu (2017) proved that there are three kinds of "dominant factors," which should be noted in the metaphor research. The first factor is the highest quantity: quantitative dominance. The second factor is the highest dispersion rate: dispersing dominance. The third factor is the highest "sum-relate" value: chronological dominance (Shimizu, 2014, 2015).[4)] The combination of these three dominant factors makes the "five agreement patterns" (Table 1) as described below.

Table 1 Five agreement patterns of three dominant factors

	Per 1,000	Dispersion	Sum-relate
Pattern-**A**	highest	highest	highest
Pattern-**B**	highest	highest	-
Pattern-**C**	highest	-	highest
Pattern-**D**	-	highest	highest
Pattern-**E**	-	-	-

*** Five agreement patterns of dominance** (Shimizu, 2016, p. 9)

Pattern-A: Highest Per 1,000 (highest quantity) + Dispersion (highest uniform spread) + Sum-relate (highest chronological correlation) are all dominated by the same single CMG (conceptual metaphor group).

Pattern-B: Highest Per 1,000 + Dispersion are held by the same CMG.

Pattern-C: Highest Per 1,000 + Sum-relate are held by the same CMG.

Pattern-D: Highest Dispersion + Sum-relate are held by the same CMG.

Pattern-E: All dominant factors (Per 1,000, Dispersion, Sum-relate) belong to different CMGs

The aggregated results obtained in the extensive study are summarized in Table 2. Based on the appearing frequency of 39.1% displayed in this table, Shimizu (2017, pp. 8-9) concluded that "Pattern-C is truly a clear representation of the symbolic, metaphorical structure of business speeches." In the same way, Table 2 indicates that the typical agreement patterns of dominance for PPS Bush is Pattern-A (45.5%), and that for PPS Obama is Pattern-B (50.0%).

Table 2 Five agreement patterns of dominance: edited from Shimizu (2017, p. 13)

		A	B	C	D	E	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	E(%)
BES corpus 2005-2010	2005	3	1	4	0	2	30.0%	10.0%	40.0%	0.0%	20.0%
	2006	4	2	3	0	1	40.0%	20.0%	30.0%	0.0%	10.0%
	2007	4	2	1	0	3	40.0%	20.0%	10.0%	0.0%	30.0%
	2008	0	0	4	0	6	0.0%	0.0%	40.0%	0.0%	60.0%
	2009	2	0	5	1	2	20.0%	0.0%	50.0%	10.0%	20.0%
	2010	1	3	4	1	2	9.1%	27.3%	36.4%	9.1%	18.2%
	2011	1	2	5	2	2	8.3%	16.7%	41.7%	16.7%	16.7%
	2012	3	3	2	1	1	30.0%	30.0%	20.0%	10.0%	10.0%
	2013	3	2	4	1	1	27.3%	18.2%	36.4%	9.1%	9.1%
	2014	1	3	6	0	1	9.1%	27.3%	54.5%	0.0%	9.1%
	2015	1	0	7	1	1	10.0%	0.0%	70.0%	10.0%	10.0%
PPS Corpus 2005-2010	Bush	5	2	1	1	2	45.5%	18.2%	9.1%	9.1%	18.2%
	Obama	0	5	2	1	2	0.0%	50.0%	20.0%	10.0%	20.0%
	Total	**28**	**25**	**48**	**9**	**26**	**20.6%**	**18.4%**	**35.3%**	**6.6%**	**19.1%**

	A	B	C	D	E	A(%)	B(%)	C(%)	D(%)	E(%)
(1) Business 2005~2009	13	5	17	1	14	26.0%	10.0%	34.0%	2.0%	28.0%
(2) Business 2010	1	3	4	1	2	9.1%	27.3%	36.4%	9.1%	18.2%
(3) Business 2011~2015	9	10	24	5	6	16.7%	18.5%	44.4%	9.3%	11.1%
(4) Business 2005~2015	23	18	45	7	22	20.0%	15.7%	**39.1%**	6.1%	19.1%
(5) Political (G. W. Bush)	5	2	1	1	2	**45.5%**	18.2%	9.1%	9.1%	18.2%
(6) Political (B. Obama)	0	5	2	1	2	0.0%	**50.0%**	20.0%	10.0%	20.0%
(7) Political GB & BO	5	7	3	2	4	23.8%	33.3%	14.3%	9.5%	19.0%

III Investigation: Long-Term Trends in Business and Politics

3.1 Purpose

This section further explores the results provided by Shimizu (2017) by making visual, statistical analyses. Theoretically, there are two perspectives regarding the chronological approach to metaphor. One is concerned with rather a shorter span, such as the metaphorgram analysis of a single, individual speech. The other analyzes an even longer span, such as the "Meta-Analysis" (Reinard, 2006, pp. 317-344), which discusses a more extensive series of related studies. Such a long span in analyzing the statistical time series data may disclose a clue to the chronological trends of metaphors in business and political speeches.

Table 3 Correlation coefficients between five dominance patterns

Correlations

		A	B	C	D	E
A	Pearson Correlation	1	.307	-.649*	-.300	-.336
	Sig. (2-tailed)		.358	.031	.370	.312
	N	11	11	11	11	11
B	Pearson Correlation	.307	1	-.527	-.010	-.466
	Sig. (2-tailed)	.358		.096	.976	.148
	N	11	11	11	11	11
C	Pearson Correlation	-.649*	-.527	1	.234	-.175
	Sig. (2-tailed)	.031	.096		.489	.607
	N	11	11	11	11	11
D	Pearson Correlation	-.300	-.010	.234	1	-.366
	Sig. (2-tailed)	.370	.976	.489		.268
	N	11	11	11	11	11
E	Pearson Correlation	-.336	-.466	-.175	-.366	1
	Sig. (2-tailed)	.312	.148	.607	.268	
	N	11	11	11	11	11

*. Correlation is significant at the 0.05 level (2-tailed).

3.2 Results: Long-term trends of BES corpus 2005-2015

First of all, Fig. 2 shows the chronological trends of five agreement patterns of dominance, Patterns A to E, recorded in the BES corpus 2005-2015. This visual image was created using the original annual time series data shown in Table 2 in Section 2-2.

Table 3 is the result of statistical correlation analysis, using SPSS 20. The highest statistically significant correlation (r = -.649, p < .05) is found between Patterns A and C. The second highest coefficient is found

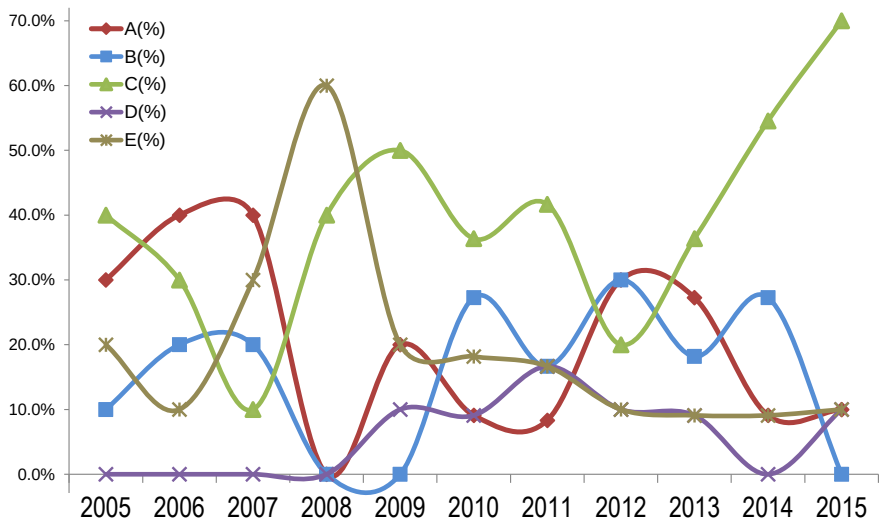


Fig. 2 Chronological trends of five agreement patterns: BES corpus 2005-2015

between Patterns B and C (r = -.527, p < .1). This second one is, critically speaking, generally non-significant (p > .05). However, given the fact that the other coefficients in Table 3 are apparently non-significant (p > .14) with even weaker coefficients, the correlation between Patterns B and C appears to be relatively reliable as far as Patterns A-E in these 11 years are concerned.

Figs. 3a-3e are the visual outputs of the statistical time-series auto-correlation analyses (ACF) of these Patterns A-E, using SPSS 20. Each correlogram graphically indicates a periodic behavior, if any, in the time series. The autocorrelation, or lagged correlation, helps to determine how the values of the time series in its own past correlate with its future values. They tell to which degree, and to which direction, each pattern has a statistically significant periodic trend. As this is an annual time series data, one lag in Figs. 3a-3e is equivalent to one year.

IV Discussion

Fig. 2 casts a compelling argument regarding the sudden transitional changes recorded in 2008. What happened? One possible assumption is that the new President-elect Barack Obama emerged as a new political leader at that moment. Responding to the people's new mood for "change," it seems that business executives sensed the mood and shifted the conceptual approaches in their speeches. Coincidently, Pattern-A, George W. Bush's characteristic agreement pattern of dominance, suddenly declined to zero in 2008. This means that business executives did not apply the same pattern as Bush's in their business speeches. Instead, Pattern-E skyrocketed in the same year. It may be a reasonable hypothesis that the businesspeople's mood for change in politics was reflected in this drastic transformation in the agreement patterns of dominance in the real business world. As seen in Table 1, Pattern-A allows a single conceptual metaphor group (CMG) to dominate all three factors, while Pattern-E reflects a wide variety of conceptual metaphors in speeches (Section 2.2). This complete

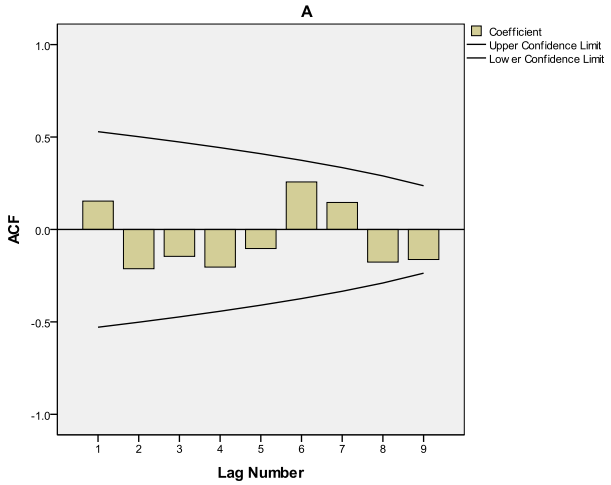


Fig. 3a Correlogram: Pattern-A

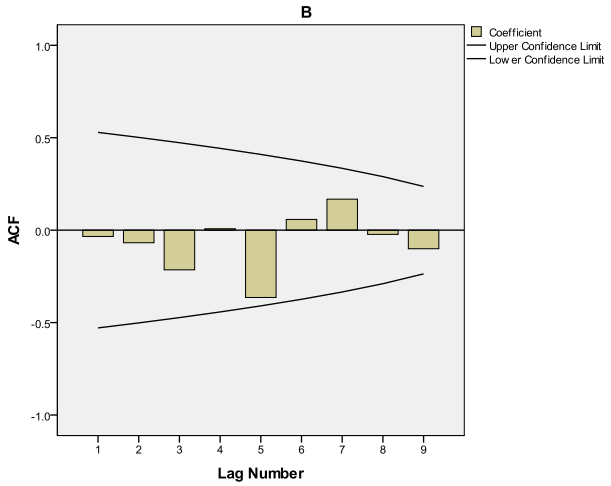


Fig. 3b Correlogram: Pattern-B

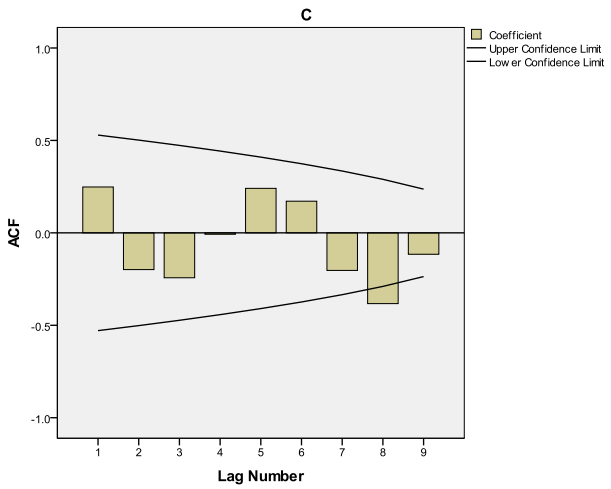


Fig. 3c Correlogram: Pattern-C

contrast in the conceptual structures in business speeches appeared to endorse the significant change in politics in 2008.

Similarly, Fig. 2 also shows a transitional signal in 2012, where Pattern-C started to rise remarkably to the highest point in 2015. As Table 2 indicates, Pattern-C is the most characteristic pattern of business speeches. This means that business executives spoke to be even more "businesslike" after 2012 when Barack Obama's second presidential election took place. Also, Pattern-B, Barack Obama's characteristic agreement pattern of dominance, suddenly declined to zero in 2015, a year before he left office. This is a similar phenomenon to that observed in 2008 when George W. Bush's typical pattern (Pattern-A) declined to zero and left office.

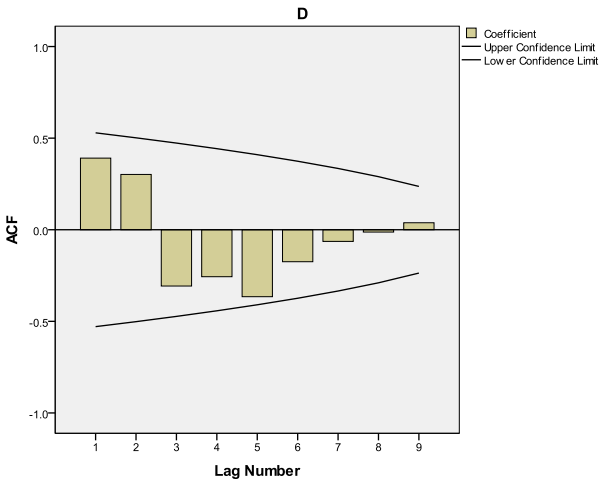


Fig. 3d Correlogram: Pattern-D

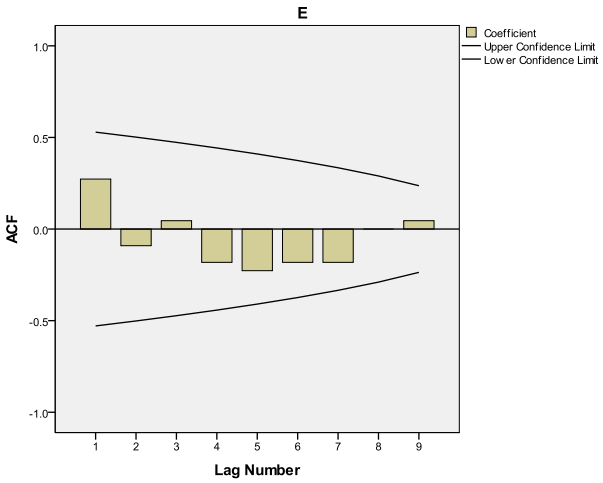


Fig. 3e Correlogram: Pattern-E

If we remember the consequence of this increase of "businesslike" speeches in business, this excessive rise of Pattern-C in 2012-2015 becomes even more stimulating. That is because a real business executive, Donald Trump, became President-elect in the following year. Stated in another way, the mood and need for Trump's victory had been previously "witnessed" in these chronological trends of conceptual metaphors in business speeches.

Observed from a statistical point of view (Table 3), Pattern-C demonstrated considerable negative correlation coefficients with Pattern-A (r = -.649, p < .05) and with Pattern-B (r = -.527, p < .1). This result indicates the opposite chronological characteristics between Patterns A and C, and between Patterns B and C. These long-term trends can be clues to the hidden chronological relationships between business and political speeches. While the political conceptual styles in business speeches (Patterns A and B) increase, the authentic businesslike conceptual style (Pattern-C) decreases. Also, the opposite is true. In short, this statistical observation of this long-term trend highlights the underlying relationships between business and political speeches.

Another statistical approach, a time series analysis, also supports this interpretation. Among the time series correlograms of Patterns A-E shown in Figs. 3a-3e, only Fig. 3c (Pattern-C) indicates a statistically significant autocorrelation with -8 lags. This indicates that every eight years, the chronological trends of businesslike executive speeches shifts in the opposite direction: from rising to declining, or from declining to rising. In other words, business executives demonstrate a conceptual "change" in their speeches every eight years, a president's two terms in office, intentionally or unintentionally. This is an exciting suggestion implying that the presidential elections may affect the words of business leaders.

Each assumption above is not a direct, definite proof of the correlations between business and political speeches. However, it is plausible that the following phenomena are not merely coincidental.

(1) The trend of Pattern-A (Bush's conceptual style) made a sudden decline in 2008 when he left office.

(2) The trend of Pattern-B (Obama's conceptual style) made a sudden decline in 2015, a year before he left office.

(3) The trend of Patten-C (Business-oriented style) made a steep increase from 2012 (a presidential year) to 2015, a year before a real business executive, Donald Trump, became President-elect.

(4) Pattern-C demonstrated considerably higher correlation coefficients with Patterns A and C.

(5) Only Pattern-C demonstrated a statistically significant negative autocorrelation with eight lags (eight years), the same as the president's two terms in office.

This article, therefore, provides evidence to support working correlations between business and political speeches, with a specific focus on the relationships between the conceptual structures in the words of business and political leaders.

V Conclusion

Many people vaguely understand that business and political speeches are somewhat correlated with each other, but it has not been demonstrated in a concrete and specific way. In this regard, the findings in this study have provided more vital clues to discover the underlying relationships between business and political speeches. These clues must be regarded as important because business speeches can be a game changer for politics, and vice versa. They both cannot be inseparable.

A further study may take a more direct approach to the relationships between business and political speeches, such as comparing business and political speeches in the same single years of the presidential election (e.g., every four/eight years). The conceptual structures of these speeches delivered in the same year may reveal stronger characteristic similarities. Also, the chronological variations – more specifically, ups and downs – of Pattern-C can be compared to those of presidential approval and disapproval rates. This attempt will also be able to unveil which factor precedes the other in the period of history.

When analyzing business speeches, it is vital to pay profound attention to political speeches at the same time because business and politics are interweaved in the society. Neither of them can stand alone. This, in turn, highlights the importance of clarifying the roles and relationships of business and political speeches. In this regard, metaphorgram analysis, which can conduct micro and macro investigations about the concepts behind words, will be more valued in the research. It is expected that continuous effort and interest in investigating metaphorical structures will realize smoother and stronger speech communication in the future.

Notes

1) A metaphor candidate is a word that is annotated automatically in the automated concordancing process. When a metaphor candidate has passed the manual verification process, it becomes a metaphor keyword."

2) In this article, in order to distinguish between the conceptual metaphor and its linguistic metaphorical expression, metaphoric concepts are represented graphically by SMALL CAPITALS.

3) T-Scope's calculating behavior is like counting metaphor keywords using a magnifying glass, while moving it over the manuscript from top to bottom. The "Scope" value corresponds to the size of the glass, while the "Step" value determines the speed or distance of its movement (Shimizu, 2014, pp. 60-62).

4) The third dominant factor (highest "sum-relate" value) shows which conceptual metaphor group (CMG) has the dominant role in the speech from a chronological perspective. From an extensive corpus based analysis, Shimizu (2015, p.109) proved that the third factor works correlatively with, but not exactly the same way as, the first factor (highest quantitative value), while it plays an independent, separate role from the second factor (highest dispersion rate).

References

Clancy, J. J. (1989). *The invisible powers - The language of business*. Toronto: Lexington Books.

Koller, V. (2008). Brothers in arms: Contradictory metaphors in contemporary marketing discourse. In M. S. Zanotto, L. Cameron, & M. C. Cavalcanti (Eds.), *Confronting metaphor in use: An applied linguistic approach* (pp. 103-125). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Lakoff, G. (2008). The neural theory of metaphor. In R. W. Gibbs, Jr. (Ed.), *The Cambridge handbook of metaphor and thought* (pp. 17-38). New York: Cambridge University Press.

Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press.

McKerrow, R. E., Gronbeck, B. E., Ehninger, D., & Monroe, A. H. (2000). *Principles and types of speech communication.* New York: Longman.

Reinard, J. C. (2006). *Communication research statistics*. California: Sage Publications Inc.

Scott, M. (2008). WordSmith Tools (version 5), Liverpool: Lexical Analysis Software.

Shimizu, T. (2010). "Mental distance" concept for chronological metaphor analysis of business executive speeches, *Osaka Keidai Ronshu [The Journal of Osaka University of Economics], vol.60(6)*, 245-268.

Shimizu, T. (2014). Examining the dominance of conceptual metaphors in business speeches: The third factor, *Kokusai Joho Kenkyu [The Journal of the Japanese Society for Global Social and Cultural Studies], vol.11*, 56-67.

Shimizu, T. (2015). An extensive study on characteristics of business speeches: A corpus-based approach to metaphors in business, *Kokusai Joho Kenkyu [The Journal of the Japanese Society for Global Social and Cultural Studies], vol.12*, 104-115.

Shimizu, T. (2016). A comparative analysis of conceptual metaphors in business and political speeches: A chronological approach, *Kokusai Joho Kenkyu [The*

Journal of the Japanese Society for Global Social and Cultural Studies], *vol.13*, 3-14.

Shimizu, T. (2017). Metaphorical structures of business speeches reexamined: Insights from metaphorgrams of 110 business executive speeches, *Kokusai Joho Kenkyu [The Journal of the Japanese Society for Global Social and Cultural Studies]*, *vol.14*, 3-14.

Shimizu, T., & Shimokura, M. (2010). Developing the T-Scope (version 2.0) program for a statistical approach to business metaphor analysis, *Osaka Keidai Ronshu [The Journal of Osaka University of Economics]*, *vol.61(2)*, 329-343.

変化するラーメン像

- ラーメンにおける「中華」と「和」のイメージの変遷 -

増子 保志
日本国際情報学会

Change of ramen image

—History of "Chinese" and "Japanese" images in ramen—

MASUKO Yasushi
Japanese Society for Global Social and Cultural Studies

"Ramen" is now different from Chinese noodles originated in mainland China and develop itself into a Japanese food with diversity. On the other hand, back in 1980s, Japanese Ramen had little diversity – basically on the premise of Chinese elaboration - than that of today. Then 1990s showed a gradual change on it when a concept of "Wa" (=Japanese spirit of harmony) was brought into Ramen with more recreational value of food and in that process, it became something emphasizes "Japanese tradition" instead of Chinese elaboration. Here we take a look at this "Ramen transition" in Japan from a viewpoint of both "Chuka" (=Chinese) and "Wa" images with time series analysis.

１．はじめに

ラーメンの具からナルトとほうれん草が消え、新たに海苔と煮玉子が現れた。具材の変化だけでなく醤油や味噌、塩が定番だった時代から豚骨、魚介、そしてつけ麺が加わった。

ラーメンほど呼称が変化する料理は珍しい。南京そばに始まり、支那そば、中華そば、ラーメンと変化し現代のラーメン店は、カタカナ表記ではなく麺屋、麺処と称し、海外においては Ramen として人気を博している。

ラーメン店の内外装も変化した。赤地に白抜きで書かれた暖簾や赤の雷紋や双喜紋入りの丼が消えイメージカラーは赤ではなく黒や紺となり看板やメニューの文字は手書きで書き殴った感じとなった。さらに店主や店員の格好も変化し白いダボシャツスタイルは作務衣や T シャツとなり頭にはキャップやバンダナをつけるようになった。[1]

1980 年代までの街場の中華屋を中心とした日本のラーメン店はみな似たり寄ったりで今日に見られるような多様性は存在していなかった。1990 年代になってラーメンは新しいステージに変化する。食品としてのラーメンではなく娯楽の一部としてのラーメンという機能を有するようになる。それに呼応するかのように、ラーメンが持っていた中国的な意匠を剥ぎ取って「日本の伝統」を強調するものに変化した。なぜこのような変化が生じたのかに疑問を持ったのが本研究を行う動機である。

我が国のラーメンには、大きく分けて 2 つの流れがある。1 つは、中華街（南京街）などでの中国からの移住者の営む中華料理屋や、戦前の来々軒に始まり戦後は中国や旧満洲国からの引揚者などが開店した日本風の中華料理屋のメニューである。2 つは、屋台での販売と、その流れを汲む固定店舗を開設したラーメン屋である。中国でラーメンの調理法を覚えてきた人が多かったのに加え、安い材料で美味しく

栄養あるラーメンは、物資が乏しい戦後にはうってつけだった。屋台自体は、古くは江戸時代の固定式屋台の夜鳴き蕎麦屋からの風習にのっとり、調理器具を積んで夜間に商売していた。チャルメラで鳴らして流しの移動式屋台で市中を回る光景は昭和 30 年代まではよくみられた。

長年に渡り、庶民の味として親しまれてきたラーメンであったが、1996 年、中華そば青葉が、魚介系と動物系の出汁を合わせる W スープのラーメンを打ち出したのをきっかけに、スープ料理としてのラーメンの価値が見直され、創作ラーメンブームにつながった。スープの出汁、タレ、香味油、煮玉子などのトッピング、麺と、ラーメンのあらゆる要素について新しい試みを行う料理人と店が次々と現れ、当時、普及が始まったインターネットのサイト上でのラーメンの食レポや新世代のラーメン評論家、ラーメン特集を組む情報誌やテレビの情報番組、新横浜ラーメン博物館などとの相乗効果もあり、ラーメンの多様化が一気に進んだ。この流れは現在も続いており、ラーメンは日本料理において最も変化が激しく、多様化された料理形態となっている。

２．先行研究と仮説の提示

１）先行研究

①速水の研究

速水（2011）はジャーナリストらしく社会学視点からラーメンの変化を戦後日本の変動と重ね合わせて論述している。その中で、なぜ現代の「ラーメン職人」は作務衣を着るのかという問題意識のもと「作務衣」を現在のラーメン店を象徴するキーワードだと考え、「作務衣系」と呼称している。

速水によれば、それまで中華風の意匠を凝らすのに努力していたラーメン店が、1990 年代からその意匠を「和」の方向にシフトしてきたという。速水の言う作務衣系がラーメン店を代表するスタイルとして定着したのは、90 年代末で、そのイメージは日本の伝統工芸職人の出で立ちを源泉としているとする。生産技術で勝るアメリカに、”職人の匠”だけで戦争に挑み大敗を喫した日本が、戦後はものづくりで復興したが、ラーメンの世界は、再びものづくりのロールモデルとして”職人の匠”を重視する伝統職人を選んだと言う。

速水はこれらの現象を「和のイメージ」への伝統回帰的、国粋主義的色彩を帯びているのが最近のラーメン店の特徴であり、有名店の店主達は、90 年代のバブル崩壊後の就職氷河期世代と重なる人が多い。この時代、不況とグローバル化の波が押し寄せる中「Ｊポップ」や「Ｊ文学」という言葉に代表されるように「日本的なものを取り戻す」という雰囲気が広がった時期である。中国由来の食べ物なのに、日本的な職人・芸術家風を装う「作務衣系」の増加は、ラーメン業界に根付く実力主義・職人気質の反映に加え、日本回帰を好むような時代の空気感も背景にある、と見ることができると主張している。

しかし、そもそも作務衣は、禅宗の僧侶が日常的な業務＝作務のときに着る作業着であるが、現在の作務衣と称されている着物は、それとも違い、戦後に甚平ともんぺをミックスしたものである。歴史はきわめて浅く、日本の伝統ともまったく関係がない。さらに速水が主張するように「中華風の意匠を凝らすのに努力していた」とあるが、果たして如何なる努力をしていたのか不明である。また作務衣＝愛国主義というのは余りにも短絡的であり、それが「和」のイメージを醸成している要因とは考えにくい。

②　ジョージ・ソルトの研究

アメリカ人からの視点として、ジョージ・ソルトの研究がある。ソルト（2015）は、ラーメンには様々な矛盾があるとする。元々中国で生まれ「支那そば」と呼ばれた食品でありながら、今やほとんど日本の食べ物として受け入れられている。高度経済成長期に入り、労働者や貧乏学生たちにラーメンは支持され、広がってゆく。そして、安藤百福のチキンラーメ

ンの発売と、さらにその後のカップヌードルの誕生がラーメンの庶民化を加速させる。戦後の日本のライフスタイルは時代とともに確実に変化し、ラーメンは変わり行く食文化の中で重要な位置を占めるようになってゆく。生活が豊かになってゆく中で、ラーメンには手軽さやカロリー供給手段以外の意味づけがなされることが増えてゆく。個性的なラーメンを作る店主が人生訓を語り、伝統工芸家のような作業着をまとうようになったとする。

ソルトの研究は、前述の速水の著作に多くを依拠している故、ラーメンの変化の流れを速水と同様に捉えている。1990 年代のラーメンの変化を「ラーメンが中国から切り離され、日本のものとしてイメージチェンジしたことが最も明確にわかるのは、ラーメン職人が着る制服の変化だ。高度成長時代、ラーメン店の従業員は起源である中国に敬意を払って、中国人コックのトレードマークの白衣と円筒帽衣姿をしているのが普通だった。しかし、1990 年後半から 2000 年代に、主として博多一風堂に影響を受けた若い店主たちが、仏僧の作業着である作務衣を着るようになる。日本の陶工や伝統工芸家が身につける作務衣は一般的に紫や黒の、18 世紀の日本の職人着で、ラーメンが国民食としてイメージチェンジした 1990 年代まではラーメン調理人の服にふさわしいとは考えられていなかった。この新しい衣服が暗示していたのは、ラーメン調理人がもはや中華の料理人というより、禅僧の感性を持つ日本の職人だと考えられていることだ」[2]と述べている。

ソルトは速水と同様にラーメンの変化を料理人の制服の変化と関連づけている。また、「高度成長時代、ラーメン店の従業員は起源である中国に敬意を払って、中国人コックのトレードマークの白衣と円筒帽衣姿をしているのが普通だった。」としているがこれは高級中華料理店の調理人の場合で、街場のラーメン店には当てはまらない。

③　河田の研究

河田（2001）は「1990 年代半ばのラーメンの変化は、単なる日本の変化ではなく世界的な料理の変化であるヌーベルキュイジーヌと連動したものであると指摘している。フランス料理の変革運動であるヌーベルキュイジーヌでは大皿料理の伝統を廃し、個別の皿に料理を盛り付けるなど古典的なスタイルから庶民的な食文化を重視する。具体的には食材の風味を生かすことを優先し、伝統よりも料理人による創意工夫に力点が置かれた」とする。確かにこの時期よりラーメンに多様性が見られるようになり、料理人の個性が現れたラーメンが登場するようになる。しかしながら、他店との差別化を図るには独自の創意工夫は必要条件であり、それがヌーベルキュージーヌの影響を直接受けたものとは考えにくい。

いずれの先行研究も 1990 年代を境に急減にラーメンのイメージが変化した様に述べているが疑問が残る。

本研究では、以上の先行研究を踏まえた上で、下記の仮説を提示する。

２）仮説の提示

①　「和」へのイメージの変化は、先行研究が論じている 1990 年代に突然起きたのではなく、中華そば時代から継続されてきたものであり、その変化には他の要因が存在するのではないか。

②　「和」へのイメージの変化はあくまでも伝統的な裏付けを持たない、意図的に演出された雰囲気上の「和」に過ぎないのではないか。

本研究では、「中華」の意匠と「和」の意匠というイメージの観点から、その変遷を時系列的に考察し、先行研究で示されている 1990 年以降のラーメン像の変化を中心に上記の仮説の検証を行うものである。

３．イメージから見たラーメン像の変遷

１）「中華」としてのラーメン像

①　中華街の中のラーメン（柳麺・拉麺・南京そば時

代）

1868 年に明治維新が起こり、西洋式の政治構造や産業、軍事を積極的に取り入れる過程の中で中国華僑が条約港である横浜や神戸、長崎、函館に流入した。1871 年日清修好条約が締結され中国人個人が日本の事業主との取引が許可された。その中で技術の一つとして料理が持ち込まれ「柳麺・拉麺」が中国人居留地において定着した。日本人は中国人料理人が作るこの麺を明朝の首都・南京にちなんで「南京そば」と名付けた。当初の南京そばに具材のトッピングは無く、現代の塩ラーメンに近似したものであった。

1889 年外国人に対して指定地域以外の居留を認めていなかった法律が緩和され、在留華僑の移動、居留が可能となり中華街（南京街）において屋台を中心として南京そばが提供された。この時期の需要は在留の中国人が中心であり「中華」そのもののイメージであったと推察される。

② 浅草・来々軒の開業（支那そば時代）

日本の工業化の進展とともに 1890 年代の労働者の増加は都市部の食堂や外食施設の需要を増大させる要因となった。[3] 職を求める労働者の増加によって都市部の人口構成は変化し、東京の飲食業への刺激となり当時、汁麺を提供していた中華料理店、洋食店、屋台という 3 つの業態が拡大することとなった。

1910 年、横浜税関の職員であった尾崎貫一によって浅草に来々軒が開店した。来々軒の麺料理は「支那そば」と呼ばれ、南京そば時代の具なし汁麺ではなく、醤油だれを使用し、シナチク（メンマ）[4]を具材として取り入れ、焼売や雲呑とともに中華料理の一つとして提供された。

中華料理の看板を掲げ、中国人料理人を雇用して中華料理を提供していたが、①タレに醤油を使用したこと②具材を取り入れたことで日本化のはしりと見られる現象が起きたと言える。基本的に東京圏における醤油ラーメンに関してはこれ以後《来々軒》の味を踏襲していくことになる。

来々軒の開店を期に一般大衆に支那そばの存在が広く認知されることとなった。大衆に広く浸透できたのは異国的な物への憧憬とともに、同じ汁麺でも日本の蕎麦とは異なり早く提供され、食べ応えがあり労働者階級の需要に上手く適合したことが理由として挙げられる。

さらにこの時代に中華料理が大衆に取り入れられたのは、中華料理が伝統的な和食よりも優れていると考えられていたからであった。石毛によると「西洋料理と中華料理が受け入れられた大きな理由は、肉や油脂、香辛料など日本の料理には欠けているものが入っていたからだ。近代的な栄養学の知識が深まるにつれ肉料理はエネルギー源だと見られるようになり、西洋料理と中華料理は栄養価が高いと考えられるようになった。」[5]と述べている。

この時代に支那そばが普及した理由として①労働者の増大による安価で高カロリーの需要が増大したこと②物流の発達により小麦粉や肉などの材料の入手が進展したこと③生産技術の発展に伴って麺の加工技術が機械化され大量生産が可能になったこと④異質なものとしての興味からの中華料理の流行がお互いに作用して日本での受容に繋がったと言えることから、この時代は中華料理の一つとしての認識がなされており、意図的に中華の装いをする必要性は無かったと考えられる。

当時、来々軒が使用していた丼も真っ白で模様もなく内側に青い線が 1 本入っているだけのシンプルなもの[6]であったことから意図的な中華の装いは無かったとことが裏付けられる。[7]

③ 関東大震災以後の中華イメージ

1923 年（大正 14）年の関東大震災以後、東京圏の飲食業は増大した。この時期に増加した料理店の中で支那そばを提供していたのは、支那そば屋（中華料理店）、洋食屋（西洋式食堂）、喫茶店、支那そばの屋

台で食することが可能であった。当時の喫茶店や洋食屋は新しい食べ物を紹介する機能を持っており、オムライスなど西洋の技術をアレンジして新しい食べ物を作り出していた。支那そば屋においても状況は同様で単一のメニューから日本風にアレンジされた料理が提供された。

この時期から白地の丼に龍の絵が描かれ、「囍」のマークが入り四角い渦巻き模様が縁を彩った支那そばの食器（丼）に中華模様が登場するようになった。龍は皇帝の紋章を表し一般人は使用してはならないもの。「囍」は双喜と言い結婚式など縁起の良いシンボルの一つである。四角い渦巻き模様は、字の如く中国で自然界の驚異の象徴である雷をかたどった伝統の文様である。古くは中国の殷や周の時代の青銅器に多くみられた。[8]この様に中国文化の象徴を装飾することによって「中華」というイメージを強調することで他の料理との差別化を図るものである。

店舗の装飾に関しても関東大震災後（大正 14 年）を契機として屋台のラーメン店が続々誕生し、この時期から屋台に暖簾を掲げる習慣が広まったと言われている。遠目から見ても即座に中華屋と判断できる用途で使用されたと考えられる。中華料理店の暖簾は白地に赤字、赤地に白字または黒字で店名や中華料理店であることを示す名称や味自慢などという宣伝文句が書かれ、雷文を周囲にあしらったデザインで「中華」を象徴していることが多い。

具材も多くなる。広東地方の家庭料理で使用されていたシナチクをのせ、叉焼（日本化されたものではあるが）[9]日本の醤油出汁を使用したスープの中に中国由来のシナチクや叉焼などをのせることで中華のイメージを醸成しながら、ほうれん草や東京を主張する浅草海苔、ねぎなど日本蕎麦店由来のなると[10]を重ね合わせることで、日本料理風の和のイメージをも演出した。

私見ではあるが、震災復興後と昭和初期に繋がる経済成長の波に乗っている日本社会を反映するがごとく、支那そばは豪華になるとともにそのエネルギーが中国由来のシンボルである食べ物を丼と一つの世界に見立てて、それを閉じ込めそれを中国と仮想した上で食してしまおうという中国蔑視を内包した植民地主義の萌芽が見られるとも言えるだろう。

２）日本化するラーメン像

①　中華そば時代

戦後日本の食糧事情の悪化に対して、アメリカは人道支援の名のもとに小麦粉の緊急援助を実施した。ひとつはアメリカの農家の小麦過剰による価格の暴落を防ぐ目的で大量の小麦を日本にもたらした。ガリオア資金による日本供与も 7 割が食糧になった。アメリカが学校給食用の小麦を無償提供したのは、慈悲のためではない。日本政府が小麦を輸入する取り決めに応じたからだった。 同時に 46 年、外務事務次官通達により「支那」という呼称が禁止され[11]「中華」という呼称を使用することになった。

1950 年 2 月 25 日まで継続された飲食業緊急処置令によって、食品の行商がほぼ禁止されていたにも関わらず、アメリカ小麦の輸入増加の結果として再び東京に中華そばを提供する屋台や中華料理店が現れた。

輸入ラードと小麦粉で作られた中華麺の消費は相対的に増加し、製粉業者は輸入小麦の一部を闇市の商人への横流しを行った。奥村によると屋台で販売されていた中華そばと餃子の人気が終戦直後に向上したのは、スタミナが付くと考えられていたからだと述べている。[12]

先に石毛が述べているように既に、中華料理は食べると力が付くという一般的な認識が出来上がっており、小麦粉と動物性タンパク質の優位性についてのアメリカのプロパガンダも中華料理への認識を向上させた。

さらに奥村によると闇市の商人が中華そばを選択した理由について、「支那そば（原文のまま）の材料

の配合や麺条の価格も決められていました。そうこうしているうちに 1950 年を迎えます。コムギの統制が解除され、中華そば屋が増えます。それは素人でも簡単に商いができたからです。中華そばやスープ、茹で湯、トッピング用の具、鉢、箸などをセットした屋台を貸し出す業者が現れ、それを借りて街をチャルメラを吹いて流す屋台の総締めで、売り上げの何%かを懐に取り込んだのです。それでも引き子（屋台を借りて中華そばを売る人）には充分に金がまわりました。」[13]という参入しやすい業種であった。

占領下で中華そばを復活させた要因として戦地からの引揚者の役割が挙げられる。屋台は安価で容易に開業が可能であったため着の身着のままで帰国した引揚者や多くの中国人や朝鮮人が同様に中華そばを扱った。

我が国におけるラーメンに関する歴史研究[14]は中華そばの大衆化における引揚者の役割を重要視する一方で、中国人や朝鮮人の役割については殆ど言及されない。戦地からの日本人引揚者の困難と忍耐という文脈のみで語られることが多く、中華そばの復活における非日本人の重要な役割を意図的に隠蔽していると言える。

同時に中華そばが持っていた中国という象徴性が薄くなったのは、国交問題とともに敗戦による日本人の中国への眼差しの変化によるものであろう。「中華」とは名乗るもののラーメン店の店主の多くが日本人となり、他国を起源とする感覚が減少していったのは、朝鮮人経営の焼肉店の状況とは対照的なものであった。[15]

② ラーメン時代

ラーメンと言う呼称の由来は諸説がある[16]。しかしながら、ラーメンという名称を全国的なものにしたのはインスタントラーメンの発売による要因が大きい。

ａ．インスタントラーメンのイメージ

1958 年に安藤百福[17]が「チキンラーメン」を開発、販売され、それまで屋台や店舗でしか食せなかったラーメンがいつでも手軽に食せる新しい”ラーメン“が誕生した。発売後、当時の日本は「もはや戦後ではない」という急激な経済気運と相まって、消費者はチキンラーメンに新しい価値を見出して爆発的人気を博すこととなった。安藤の日清食品は製品開発のみならず量産体制の拡充、流通経路の整備、メディアを効果的に使った宣伝などあらゆる分野で革新的かつ積極的な活動を行った。インスタントラーメンの爆発的人気により「ラーメン」という呼称が全国的に広まった。醤油、味噌、塩という日本人には欠かせない調味料を使用したことで中華そばと呼称されていた料理は、日本化した「ラーメン」としての存在感を得たと言えよう。

発売当初のチキンラーメンの袋には、日本語で「即席　チキンラーメン」、アルファベットで「INSTANT COOK　CHIKIN RAMEN」と印字されここには中華のイメージは皆無である。販売から 9 年後にはマスコットキャラクター「ちびっこ」や「ひよこちゃん」が登場し、親しみやすさが強調された。それ以降、現代に至るまでチキンラーメンの袋には中華をイメージするものは現れていない。

チキンラーメンの爆発的人気に乗じて同業他社もインスタントラーメンの販売を開始した。各社のイメージは下表に挙げるとおりである。マルタイの「龍」を除いて、「出前」や「屋台のチャルメラ」など、ほとんどが「和」的な意匠を使用しており、パッケージの意匠にも日本的なものを強調する傾向が見られる。

表 1　主たるインスタントラーメンのキャラクター（筆者作成）

製造会社	商品名	イメージキャラクター	発売年
日清食品	チキンラーメン	ひよこちゃん、ちびっこ	1958
マルタイ	即席丸太いラーメン	龍	1959
エースコック	即席ワンタンメン	こぶた	1963
サンヨー食品	サッポロ一番	醤油ラーメン	1966
明星食品	明星チャルメラ	チャルメラおじさん	1966
日清食品	出前一丁	出前坊や	1968

b．高級化と「中華」イメージ

1980 年に入ってカップラーメン登場以降、話題性を奪われた形となり停滞期にはいってしまったインスタントラーメン市場であったが、81 年に明星食品が「明星中華三昧」を発売した。この商品は、一般的なインスタントラーメンの価格 70 円から 120 円の高級インスタントラーメンとされ、それまで「和」のイメージを強調していたインスタントラーメンが「中華」の装飾を施すことによって高級感にイメージを演出した。

他社からも、台湾の女性タレントを起用した『楊婦人』（ハウス食品）、『麺皇』（日清食品）、『華味餐庁』（東洋水産）、『桃季居』（サンヨー食品）が販売された。

表 2　「中華」イメージを使用した高級インスタントラーメン（筆者作成）

製造会社	商品名	イメージ	発売年
明星食品	明星中華飯店	五目うま煮、四川大肉	1981
明星食品	明星中華三昧	（広東、北京、四川）風拉麺	1981
ハウス食品	楊婦人	中国家庭料理	1982
日清食品	麺皇	棒棒鶏味上湯	1982
東洋水産	華味餐庁	趙家福寿宴席	1982
サンヨー食品	桃季居	本格上海風塩味	1983

その後も明星食品は、老舗中華料理店の味や本格中華麺というイメージを利用し高級中華麺を発売している。中国皇帝料理を彷彿させる、重厚観ときらびやかな広告宣伝を行い「拉麺の歴史が変わる」「中国四千年の味を伝える幻の麺」というキャッフレーズで従来の商品との差別化を図った。古典的な中国のイメージを使用して差別化を図ったことは、「中華」のモチーフが新しく価値ある商品の指標になったこと、既にラーメンが日本の大衆食の地位を得たことを表している。

c．カップラーメンのイメージ

1971 年に日清食品から「カップヌードル」が発売された。これは「チキンラーメン」の登場に匹敵する人気を呼んだ。単に丼をカップに替えただけではなく、生活スタイルを変えてしまう可能性を秘めていた。食器を用意、洗浄する必要性がなくなり、即席めんの「いつでも・どこでも」という長所を一段と強調した。カップヌードルに関してもそのデザインは、

「CUP NOODLE」「カップヌードル」とアルファベットと日本語の表記でありスープは醤油ベースであった。その後、72 年、73 年発売されたものも天そば、カレー味と「和」のイメージがさらに強調された。

後発のサンヨー食品社のサッポロ一番カップスターにおいても醤油が強調された味つけになっており、“和風”としてのラーメンをイメージしている。

以上のように、ラーメンのイメージ形成においてインスタントラーメンの果たした役割は非常に大きい。ここにインスタントラーメン、カップラーメンは日本の創意工夫の結晶というイメージが醸成され日本を代表する食品としての地位を獲得した。それは即ちラーメンが日本化した食品のシンボルとしての意味付けがなされたと言えるだろう。

３．「和」としてのラーメン像

１）「和」を装うラーメン

① 家系ラーメン[18]の誕生と家元制度

1990 年代にラーメン業界が急速に「和」の伝統を装うようになったのは、95 年に東京に進出してきた「博多一風堂」恵比寿店、その翌年に青山に開業した「麺屋武蔵」の開業からである。しかしながら、その前駆的な表れとして“家系ラーメン”の登場がある。

1974 年、横浜の「吉村家」が開店し、“家系ラーメン”の先鞭をつけ、ラーメン業界における“家元制”が始まった。その「和」の匂わせる伝統を新しいラーメンの登場としてメディアは家系ラーメン店に関する情報を過大に提供し続けた。

② 「暖簾分け」とスタイルの伝承

ラーメン業界における暖簾分けシステムは、新たなビジネスモデルとなり、「型」を伝承する仕組みが確立していく。ラーメン道を教える鬼教官も出現する。“天空落とし”という湯切りの神業を編み出した「中村屋」の中村栄利や、入門者をしごく「佐野ジャパン」の佐野実らが輩出し、これらは「ご当人ラーメン」[19]と呼称された。

暖簾分けのシステムは、従来のファストフードチェーンで用いられるフランチャイズの仕組みとは異なり、味付けや経営のノウハウをマニュアル化、共通化せず、技術や知識、商売の心構えという古くから日本の料理界で重視されてきた「技」を伝承するシステムであった。

２）「和」を強調するラーメン

ラーメンに関する情報が過剰な状況のなか、「博多一風堂」の河原成美が 1996 年に作務衣を着用して登場した。「和」のテイストを醸成するためにバンダナや日本手ぬぐい、タオルを着用し、店内には“へたうま文字” による詩や人生訓を掲示した。 さらに、山田雄が魚介と豚骨をまぜたスープを特徴とする「麺屋武蔵」を開業、和のテイストをポリシーにして、店員全員が赤のＴシャツで統一した。これを契機として「和」のイメージを前面に出したラーメンが登場する。

また、ラーメンの意匠に”和”を持ち込んだのは河原成美と山田雄といった料理人だけでなく、コンサルティング会社もまた重要な役割を果たしたことが挙げられる。

① イメージ戦略としてのラーメン

博多一風堂の河原は、東京進出に先立ち、トータルな店のブランディングを、外部の会社に依頼する。依頼先は、1980 年代に CI（コーポレート・アイデンティティ）[20]という言葉が流行った折に、企業のシンボルマークの変更やブランド化戦略を手がけていたパシオというデザインを手掛けるコンサルタント会社である。

パシオは、河原の依頼を受け、彼が描いたイメージを実現するような内外装を手がけた。「博多一風堂」恵比寿店には、大きな鉄釜が太い鎖でぶらさがっているが、これは店の活気を表現する演出である。同様に看板やメニューには手書きの力強い文字が使われ

ている。手書き風の文字で、蘊蓄や人生訓 を壁に描くという速水の言う作務衣系ラーメン屋のルーツの一つである。

こうした「和」の強調は、コンサルタント会社が手がける店舗イメージメニューのバリエーションの 1 つとして定着していると考えられる。この様にコンサルタント会社はラーメンの意匠に「和」を持ち込んだことのみならずその普及にも大きな役割を果たしたと言える。

さらに、ラーメンの和風化の背景には、比較的高額であった和風の飲食店内装のコストが下がったという事、ラーメン店の客単価向上を目的としたプレゼンテーションとが組み合わさったものである。表現全体からみても元から存在する飲食業の自己啓発的な労務管理とイメージ戦略の組み合わさった経営的な必然性から生じたものという文脈も存在することを挙げたい。

② 新横浜ラーメン博物館と懐古趣味

1994 年に開館した新横浜ラーメン博物館は 1958 年の東京の小さな街並みの再現を目標として昔の映画ポスターや電話ボックス、路面電車の駅等の中でラーメンは日本人一般大衆の典型的な食べ物として称賛され、懐古的に美化されたシンボルとなった。

博物館の展示テクニックは、単なるフードコートとは違う、麺を中心としたランドマーク的な施設とすることを目的とし、ウオルト・ディズニー・カンパニーのテクニックを導入し「感傷的なノスタルジアの世界」を構築することにあった。[21]

博物館の展示を歴史、背景、道具、科学、文化、情報の 6 部門に分類し、歴史部門では、外来物の日本化、インスタントラーメン、地域変化という 3 つの観点から、ラーメンを日本の過去に取り込もうとしている。そこには、外国由来の食べ物を日本人の味にアレンジした日本人の創意工夫が強調されるとともに多様性の中での統一性の例として現代日本の消費の象徴になったことも強調されている。

博物館の展示の中で興味深いのは、1966 年から明星食品が宣伝に利用している「チャルメラおじさん」の特大モデルである。このキャラクターは、戦前から戦後初期にかけての典型的な屋台引きを模倣し、現実にはこのような屋台が無くなったことでの懐古趣味とともに「遠い記憶」の中とラーメンが結びつくことで「古き良き日本」を演出しラーメンが日本人とともに歴史を紡いできたというイメージを強調するものであった。

③ 「支那そば」の復活

ラーメンが国民食へと変容した時期は「支那そば」という言葉が再使用されるようになった時期と一致する。海産物や国産の小麦粉を以前より多用し、豚や鶏、塩を使用した“伝統的なラーメン”と称するラーメン店が 2000 年初めに出現し、「支那そば」が復活した。この時期「麺や維新」、「九段斑鳩」、「信濃神麺烈士洵名」、等店名に「和」の伝統をイメージする呼称を強調したラーメン店が多く開業された。

このような店舗では紅白の暖簾は無くなり、手書きの筆文字で書かれた黒や紫の暖簾に変化した。使われる丼も赤や黒の重厚な日本本来の焼物をイメージする陶器が使用されるようになった。このようにラーメンが国民食の一つとしての認識が深まるに従って店内で使用される色も「中華」から「和」の雰囲気に変化していった。

④ 日本蕎麦との関連性

代表的な国民食と言える日本蕎麦は、洗礼された食べ方のある食べ物とされている。日本蕎麦には「作法」「粉へのこだわり」「手打ち」「秘伝のたれ」「国産」といったある意味面倒な食べ物であるが、その面倒さに伝統という価値を見出しＡ級の食べ物としての位置を得ている。

これに対して、ラーメンの価値はＡ級としての蕎

麦と対極的な麺料理として認識されているのにもかかわらずその出自からＢ級としての位置に甘んじてきた。

ラーメン店における「作務衣」や「詩（ポエム）」の類は元々主に「手打ち蕎麦」業界から来たプレゼンテーションであり。1980 年代後半から飲食業界では「高い」客単価に繋がるお客に見せるタイプの和風の制服や「書」に似せたポスターやメニューが導入されていた。

東京・有楽町の蕎麦店主であった藤村和夫によると「1964 年の東京オリンピック以後、日本蕎麦業界に新しい波が押し寄せ、新規参入の「手打ち」蕎麦屋が輩出するようになった。彼らは既存の日本蕎麦店とは異なった価値観を持ち、時には神がかり的に蕎麦を論じ、旧来の日本蕎麦店が聞いたこともないような話が独り歩きするようになった」[22]と言う。

暖簾分けシステムに関しても、日本の商習慣として昔から存在するもので、街場の中華料理業界や 日本蕎麦業界においても「藪」「砂場」「更科」など旧来から存在したシステムである。

４．結果

以上から下記の結果が導き出された。

① 南京そばから関東大震災前の支那そば時代は、中華料理の一つとしての認識されており、意図的に「中華」の意匠を装う必要はなかった。

② 震災後の、支那そば店は他の料理店との差別化を図るために古代中国のシンボルを食器や暖簾、店舗の装飾に使用し、中国文化の象徴を装飾することで「中華」のイメージを強調した。

③ 戦後、「支那」という呼称が禁止され中華そばとなり、引揚者を中心に多くの日本人が料理人として参入したことで、本来持っていた中国という象徴性が薄まり「中華」と名乗るものの大衆化した料理として定着した。

④ 日本の創意工夫の結晶であるインスタントラーメンの発売によりラーメンの呼称が全国的なものになり、ラーメンのイメージから「中華」の装いが無くなり日本的なものを強調するようになった。

⑤ 日本的なものを前面に出したインスタントラーメンであったが、差別化戦略の一つとして高級感を醸成する商品には「中華」のイメージを使用した。

⑥ カップラーメンにおいても日本の創意工夫の結晶というイメージが醸成され、日本を代表する食品としての地位を獲得し、ラーメンが日本化した食品のシンボルとしての意味付けがなされた。

⑦ “家系ラーメン”の登場によりラーメン業界にスタイルとしての「和」のイメージが醸成された。

⑧ 博多一風堂や麺屋武蔵に代表される「作務衣系」における「和」のイメージは差別化戦略と付加価値の一つの表現として創られた「和風化」「職人イメージ」であり、先行研究のようにナショナリズムとの関係性は直接的には見られない。

⑨ ラーメン店における「作務衣」や「詩（ポエム）」の類は元々主に「手打ち蕎麦」業界から来たプレゼンテーションであり、1980 年代後半から飲食業界では「高い」客単価に繋がるお客に見せるタイプの和風の制服や「楷書」に似たポスターやメニューが導入されていた。

上記の結果から「和」のイメージへの変化は戦後の中華そば時代から徐々に進行し、インスタントラーメンの登場によって定着した。

さらに、 現在のラーメン店の和風化やシステムは、手打ち蕎麦業界では 1980 年代に一般化されたもので単なる模倣に過ぎないということが検証された。

５．考察

明治という日本の近代化とグローバリゼーションの時代に中国から持ち込まれた拉麺は、日本でアレンジされて変化を続け国民食と呼ばれるようになった。ラーメンが元から持っていた中国色は消え去り日本色に塗り替えられた。さらに労働者階級の食べ

物であったラーメンを意識的に創り直すことで“日本の伝統ある食べ物”として新たな領域が産出された。インスタントラーメンの登場を境にラーメンは外来の食文化というルーツは隠され日本の伝統文化と密接につながるものとして装い始めた。

ラーメンは「中華」や「和」というその時代に応じたイメージを有効に利用することで他に類を見ない料理として変化を遂げてきた。「中華」を装うことで大衆化に成功し、「和」を装うことで日本の代表的な料理として国際的に認知され発展を遂げている。また、懐古趣味的な“昔ながらのラーメン”の再評価も見られこれからのラーメンがどのような装いで変化していくのか興味深いところである。

６．今後の課題

① 東京のラーメン事情を中心に論じてきたが、ご当地ラーメンに代表されるように、各地にその地方独特のラーメンが存在し、独自の変化を遂げている。ラーメンを論じる場合、地方で変化したラーメンについても検討する必要がある。

② 1990 年以降のラーメンが「和」を装う背景には、B 級グルメとしてのラーメンの地位を A 級グルメである日本蕎麦と同格のものとして認識されたい意識が根底にあったのではないか。

以上を本研究の課題とし今後の研究に繋げていきたい。

７．おわりに

文化とは歴史的に外来のものと自らのアイデンティティとのせめぎ合いの連続である。日本の食文化においても外来文化の移入や同化と対立、独自性の強調を繰り返す。「中華」から「和」のイメージを強調したことでラーメンは Ramen として日本の代表的な料理となった。

「和」のイメージを装飾したラーメンが国際化する一方で、労働のマニュアル化が進み、技や巧み、やりがいが薄れていく中で、こだわりや職人魂が通用する数少ない業種の一つが現代のラーメン店である。タオルに作務衣という格好は、現代に残された数少ない職人であるという「和」への意気込みや憧れが、そこに表現されているのかもしれない。最後に資料の収集にご協力頂いた鈴木美喜女史に深謝する。

参考文献

東海林さだお『ラーメン大好き！！』新潮社、1985 年 8 月。
雁屋哲、花咲アキラ『美味しんぼ』38 巻（ラーメン戦争）小学館、1993 年 5 月。
小菅桂子『にっぽんラーメン物語』講談社＋α文庫、1998 年 11 月。
奥山忠政『ラーメンの文化経済学』芙蓉書房、2000 年 9 月。
河田剛『ラーメンの経済学』角川書店、2001 年 10 月。
藤村和夫訳解、日新舎友喬子『蕎麦全書伝』ハート出版、2006 年 7 月。
石毛直道『麺の文化史』講談社、2006 年 8 月。
速水健朗『ラーメンと愛国』講談社現代新書、2011 年 10 月。
大崎祐史『日本ラーメン秘史』日経新聞社、2011 年
山本利夫『日本懐かし即席めん大全』辰巳出版、20110 月。
ジョージ・ソルト『ラーメンの語られざる歴史』国書刊行会、2015 年 9 月。
6 年 1 月。
『FOOD DICTONARY ラーメン』柶出版社、2017 年 5 月。
杉村哲『グルメ漫画 50 年史』星海社、2017 年 8 月。
奥村彪生『麺の歴史』角川書店、2017 年 11 月。
田中一朗『ラーメン超進化論』2017 年 12 月。
バラク・クシュナー『ラーメンの歴史学』明石書店、2018 年 6 月。
増子保志「日本化する叉焼」『国際情報』日本国際情報学会、2017 年 12 月。
増子保志「変化するラーメン像」第 8 回超領域社会工学研究会発表要旨。2018 年 7 月。

[1] 速水健朗『ラーメンと愛国』講談社、2011 年 10 月、p3。
[2] ジョージ・ソルト『ラーメンの語らざる歴史』国書刊行会、2015 年 9 月、p
[3] 1897 年の東京府の踏査によると府内で料理店が 476 店、小規模な飲食店が 4470 店、喫茶室が 143 店、酒場が 467 店営業していた。(秋山照子「日清日露戦争と食生活」『近現代の食文化』2002 年、弘学出版、p62)
[4] 麻竹という竹を原料とし、麺の上にのせるので麺麻(メンマ)という。
[5] Naomichi Ishige(石毛直道)『The History and Culutre of Japanese Food』
(New York : Routledge 2001)、p157。
[6] 浅草来々軒の流れを汲む祐天寺来々軒では現在でも真っ白な丼が使用されている。
[7] 玉村豊男「ラーメン具学」東海林さだお『ラーメン大好き』新潮社、1985 年 8 月、p78。
[8] 一般的な意匠の図柄としては「唐子(唐児)」「龍」「鳳凰」「雷文」「双喜字」などが挙げられる。唐子は中国唐代のもので浅草来々軒のラーメン丼(どんぶり)は唐子がデザインされていた。龍・鳳凰は中国において皇帝・皇后の紋章とされる。雷文は食器の器の縁を取り囲む四角い渦巻き模様。暖簾にもあしらわれることがある「中華」イメージの象徴的な図案である。
[9] 増子保志「日本化する叉焼」『国際情報』2017 年 12 月、
[10] 日本蕎麦屋の温物のメニューにはなるとやピンク色のカマボコがのっている。(おかめうどん等)なるとの原型は江戸時代末期に遡ることができる。
[11] 中華民国が連合国の一員として第二次世界大戦の戦勝国になると、蒋介石は日本に対し、「今後は我が国を中華民国と呼び、略称は中国とするよう」主張した。1946 年(昭和 21 年)6 月 6 日通達の「支那の呼称を避けることに関する件」という外務次官通達が行われ、「中華民国の呼称に関する件」という外務省総務局長通達を公告した。これ以後、外務次官の通達により、放送・出版物においては、中国のことを支那と呼称することを自粛することになった。その理由として、中華民国の代表者から公式非公式に「支那」の字の使用をやめてほしいとの要求があったので、今後は理屈抜きにして、先方の嫌がる文字を使わないようにしたいとしている。
[12] 奥村彪生『進化する麺食文化 ーラーメンのルーツを探る』フーディアムコミュニケーション、1998 年、p175。
[13] 同書、p176。
[14] 例えば新横浜ラーメン博物館のラーメンの歴史展示。
[15] ジョージ・ソルト前掲書、p91。
[16] 札幌で誕生したラーメンは昭和 20 年代の後半には東京や大阪の一部の人に知られていた。しかし、料理名は中華そばや支那そばが主流であった、(奥村彪生『麺の歴史』角川書店、2017 年 11 月、p250。)
[17] 安藤百福:1910 年(明治 43 年)3 月 5 日 – 2007 年(平成 19 年)1 月 5 日、元名呉百福、インスタンラーメンの開発者として知られる。日清食品株式会社の創業者。
[18] 吉村家、武蔵家、武道家などが挙げられる。
[19] ラーメン評論家武内伸によって名付けられた。地域独自の「ご当地ラーメン」に対する言葉。
[20] コーポレート・アイデンティティ(英: Corporate Identity 略称: CI)は、企業文化を構築し特性や独自性を統一されたイメージやデザイン、またわかりやすいメッセージで発信し社会と共有することで存在価値を高めていく企業戦略のひとつ。
[21] ジョージ・ソルト、前掲書 p194。
[22]藤村和夫訳解、日新舎友喬子『蕎麦全書伝』ハート出版、2006 年 7 月、p7。

日本国際情報学会誌『国際情報研究』15 巻 1 号【研究論文】 2018 年 12 月 23 日発行

J・ヒックの宗教的多元主義における問題についての一考察

南部 千代里
大正大学綜合佛教研究所

An Examination of the Notion of “Religious Pluralism” in the Theory of John Hick

－In relation to the idea of Salvation in Christianity－

NAMBU Chiyori
The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University

This study explores what are the problems of “Religious Pluralism” of John Hick (1922-2012). First by representing the intellectual situations in which the idea of “Religious Pluralism” was presented to the theological world, and then by surveying the arguments about the “three categories” which define what Christianity as a religion considers itself to be, the author examines theoretical difficulties in Hick’s doctrine about “Religious Pluralism” in connection with the Christian idea of salvation.

1. はじめに

宗教的多元主義（Religious Pluralism）は、キリスト教文化圏から発せられたものである。そのため非キリスト教文化圏に生きる私たち日本人においては、それの構造的内容自体の把握が要となる。よって本研究は、まず宗教的多元主義という神学が出現した経緯を述べ、つぎにその構造を分析していくにあたって、キリスト教の自己理解が明瞭に反映されている「三つの類型」の特徴を示し、そして宗教的多元主義の代表的立場にあるジョン・ヒック（John Hick、1922-2012、以後 J・ヒックに統一）が提唱した宗教的多元主義[1)]のどこに問題があるのかを、「救済」に焦点をあてて考察する。『聖書』は「新共同訳」を使用する。

2. 宗教的多元主義の出現背景

宗教的多元主義はどのような史的背景から出現したのであろうか。その要因についてはさまざまな説があるが、本研究ではキリスト教的視点から論じられている二つの説を紹介する。そして J・ヒックが自由神学を奉ずるリベラリストとなった経緯についても述べる。

2.1 間接要因 ――自由主義神学の台頭

17・8 世紀のヨーロッパにおける啓蒙主義運動を経て、19 世紀ドイツを中心として自由主義神学（Liberal theology）と呼ばれる変革運動が起こった。これは、伝統的キリスト教神学に対抗して、理性的な認識を尊重した自由な発想、つまり『聖書』と「教会」とその「伝統」からキリスト教の教義を合理的に捉えようとする試みとして、当時主流であったヘーゲル哲学[2)]が、キリスト教神学と更には歴史学的研究方法と結びついての変革運動であった。これの代表がヘーゲル左派で、汎神論的な観点から神話的部分（キリストの処女降誕など[3)]）の削除を提案して『聖書』批判を試みたダーフィト・シュトラウス（1808-1874）と、イエスの実在性を否定したブルーノ・バウアー（1809-1882）である。その後彼らは旧自由主義と呼ばれるが、旧と新の違いは、新自由主義がキリスト教の絶対性を否定した点にある。その代表がアルブレヒト・リッチュル（1822-1889）である。彼は、キリスト教の神秘性を排除して公然と三位一体論とキリスト論を非合理なものとして否定した。

このように自由主義神学の台頭により、結果的に、

キリスト教神学は、キリスト教が諸宗教と異なる絶対的な存在であるという主張を放棄する、という「発想」をもつに至る。

伝統的キリスト教の弁証家である C・S・ルイス（Clive Staples Lewis 1898-1963）は、自由主義神学を「水割りのキリスト教（Christianity-and-water）」と呼んでいる。なぜなら「天には善なる神がいまし、万事めでたく何も言うことなし――こう言って、罪や地獄や悪魔や、それに救いといった問題にかかわる厄介な、恐ろしい教義はすべて素通りしてしまう考え方である」[4]からである。

以上のように「人間」が中心となって「神」を考えるという神学的在り方である自由主義神学の台頭は、直接的要因とは言えないが、宗教的多元主義が出現するに至る遠因と言えよう。

2.2 直接要因 ――第二ヴァチカン公会議とエキュメニカル運動

近代までのキリスト教にとり、諸宗教は克服されるべき存在であった。ある地域に根付いた如何なる宗教も駆逐して、キリスト教がそれに取って代わることが宣教の目的であり使命であった。しかし第一次世界大戦（1914-1918）以降からは、キリスト教にとって脅威になって来たのは諸宗教ではなく、神を否定するマルクス主義や無神論といった、宗教そのものの終わりを意味する世俗主義（Secularism）への高まりであった。

ハーヴィー・コックス（Harvey Gallagher Cox, Jr 1929-）が、世俗化（Secularization）[5]とは「宗教的支配や閉鎖的形而上学的世界観から自由にされるという、もうほとんど後に戻ることのできない、一つの歴史的過程である」[6] と宣言しているように、後戻りすることができないのであるならば、諸宗教と対立するのではなく、協調しあって、宗教的世俗化問題に対処しようとする動きが伝統的キリスト教から出てきた。C・S・ルイスも「クリスチャンであるなら、ほかの宗教はすべて徹頭徹尾間違っている、と信ずる必要はない。無神論者であるなら、あなたは、全世界のあらゆる宗教はその中心点において巨大な誤りを犯している、とどうしても信じなければならない。しかし、クリスチャンであれば、あらゆる宗教は、どんなに変てこな宗教でも、少なくとも真理を暗示するようなものを多少は含んでいる、と考えていっこう差支えない」[7] と、諸宗教の真理性を否定しない立場に立っている。

このような伝統的キリスト教の弁証家たちの信念に拍車をかけたのが、カトリック教会のその後の方向性に決定的な影響をもたらした、1962-65 年の第二ヴァチカン公会議「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」[8] における新しい態度である。これが諸キリスト教会間の一致協力、所謂エキュメニカル運動の実質的な幕開けであり、伝統的キリスト教の新たな変革運動の展開である。わが国においては、これによる恩恵が 1987 年に刊行された『聖書』の「新共同訳」である。

哲学や歴史学などと連動して大きく変化を遂げた自由主義神学者たちの変革運動と、カトリック教会と伝統的プロテスタンの神学者たちの変革運動との相違は、キリスト教内の諸派と諸宗教との協調路線、つまり「対話」を通して諸宗教への積極的な理解の姿勢にある [9]。

以上から宗教的多元主義出現の直接要因の一つと考えられるのは、キリスト教とは異なる諸宗教の存在と、それらの「救済」の道への可能性を、過去の過ちの反省を含めて、真剣に考えなければならなかったキリスト教自身の変化にあった、と言えよう。もう一つが、第二次世界大戦（1939-1945）後、交通網や情報のシステムが急速に発展したことによって、キリスト教と諸宗教との接触体験、つまり非キリスト教文化圏であるアジアやアフリカにおける土着宗教への深い理解から、世界を一共同体（地球村）とみるグローバルな意識が、宗教的多元主義出現への直接要因と考えられよう。

2.3 J・ヒックの略歴

1922 年英国スカボローで生れた J・ヒックは、両親と共に英国国教会に属す。父親が弁護士であったことから、彼もハル大学の法科に進学する。ところが、ヒックの著作『自伝』によると、一回生の時に霊的回心[10]を体験したことから長老派教会に籍を移す。大学も 1941 年にエジンバラ大学に移籍し[11]、1948 年まで在籍して哲学士を取得する。その間、

1942-1945 年にわたり良心的兵役拒否者としてフレンド派の救急班に加わる。

1948 年オックスフォード大学大学院哲学部に入学、1950 年に哲学博士号を取得する。その後はケンブリッジ・ウェストミンスター神学大学に在籍し、1953 年長老派教会の牧師資格を取得、3 年間ベルフォード教会にて牧会活動を務める。

1959 年米国プリンストン神学校の哲学教授として招かれる。ところが、1962 年に長老派教会の教職者としての信仰告白を余議なくされ、その場で彼は『新約聖書』に記されたイエスの処女降誕に関して「自分はこれを肯定できない」[12]と発言した。それがため米国長老派教会の会議にかけられる。教会側が出した結論は、米国長老派教会の牧師資格と、教会の管轄下にあるプリンストン神学校の教授資格との剥奪[13]であった。

この事件後、J・ヒックは早々と本国に戻り、1964 年からケンブリッジ大学に務め、次にバーミンガム大学に移籍し、神学部教授を 1982 年まで勤め上げる。

バーミンガム大学在職中に彼が目にしたものは、バーミンガム市内における宗教の多元化現象であった。つまりキリスト教徒以外の、多種多様な異教徒との宗教的出会いであった。彼はその経験から、彼自身の「神」、すなわちキリスト教の神理解と教義に対して、現実問題としての対応を迫られる。なぜなら当時のバーミンガム市では、人口の二割をイスラム教徒が占めていたからである。

キリスト教徒やイスラム教徒のほかに、ヒンドゥー教徒やシーク教徒、ユダヤ教徒、仏教徒も居住する市内で J・ヒックは「人類の一致を目指す多くの信仰（All Faiths for One Race）」という宗教活動体の議長などを務め他宗教への理解を深めていく。そのかたわらで宗教的多元主義の理論を構築し、J・ヒックは「キリスト中心主義（Chistocentrism）」から、キリスト教以外の諸宗教の中にも「神」の啓示は現われていると「神中心主義（theocentrism）」のリベラリストとなる[14]。

3. 三つの類型

J・ヒックをはじめとして、宗教的多元主義者が好んで使う類型が「救済」をどのように考えるかによって区分された、第一類型の宗教的排他主義（Religious exclusivism）、第二類型の宗教的包括主義（Religious inclusivism）、第三類型の宗教的多元主義（Religious pluralism）の「三つの類型」である。この区分は、宗教的多元主義者であるアラン・レイスの「発案」であると言われている[15]。

この経緯から、宗教的排他主義者、あるいは宗教的包括主義者であると宗教的多元主義者から非難された者たちが、納得して、自らこの類型を使用することは極めて稀である。なぜなら「公」に自分たちを批判するための「蔑称」として宗教的多元主義者がこれを用いているからである。

A・レイスの「三つの類型」以外にも、たとえばリチャード・ニーバーが提示した「五つの類型」[16] がある。これに関して古屋安雄が「神学内の諸学科の研究の成果が必要であって、そのためにはもっと時間が必要と思われる」[17]と述べ、また小田垣雅也も「i キリストないしキリスト教中心主義」、「ii 神中心主義」、「iii 救済論中心主義」という「三つの類型」を提案している[18]が、これも小田垣自身が「未だ展開が不十分」と述べていることから、本研究はキリスト教の自己理解が明瞭なことと、先行研究の多くが共通の了解事項のように認識している[19] ことから、A・レイスの「三つの類型」を用いて三者の特徴を示し、J・ヒックが提唱した宗教的多元主義において何か問題であるのかを考えてみたい[20]。

3.1 宗教的排他主義

宗教的排他主義は、諸宗教との間に「質」的な相違を前提とする立場に立つ。つまり二元論的に、たとえば神とサタン、善と悪、光と闇、生と死といった区分を用いて、キリスト教の真理性・絶対性・優越性を強く主張し、諸宗教を悪魔的な迷信で無価値なものと見做す。そのため伝統的キリスト教においては、宣教において非キリスト教文化圏の人々に対して、善であり世の光であり生へと導くキリスト教への服従を強要する立場に長く立ってきた。それの典型が、カトリック教会の「教会の外に救いなし（Extra Ecclesiam nulla salus）」であり、伝統的プロテスタント教会の海外宣教における「キリスト教の

外に救いなし」である。このドグマは、諸宗教に対して排他的な立場を反映している。その特徴は以下の通りである。

⑴ 教会中心主義

宗教的排他主義は、イエス・キリストにのみ「真理と救い」（ヨハネ 14：6、使徒 4：12）があり、キリスト教以外の宗教には真理も救いもない、すなわち価値がないという認識に立つ。これゆえに神の啓示の保有者である教会の権威が強調される。

⑵ 聖書中心主義

宗教的排他主義の主張は『聖書』の権威に基礎づけられている。イエスの生誕、生涯、十字架の死、復活がもつ普遍的意義は、如何なるリベラルな聖書解釈学によっても相対化されることはないという信念から、『聖書』を文字通りに解釈する直解主義を取る。

⑶ キリスト中心主義

「救済」に関しては、キリスト論に価値をおく。救済は、諸宗教における神・神々によって成し遂げられることはなく、唯一イエス・キリストによってのみ可能となると考える、キリスト中心主義を徹底する。これゆえに宗教多元主義者らは、キリスト中心的救済論に神学的基礎づけをしたカール・バルトを、宗教的排他主義の代表的神学者として引き合いに出して論議している。

3.2 宗教的包括主義

宗教的包括主義が登場したのは比較的最近である。従来カトリック教会はプロテスタントの諸教会を異端視してきた。だが第二ヴァチカン公会議において「離れた兄弟たち」と呼んで、共にエキュメニズム運動を展開するようになる。二者は諸宗教の真理性を否定しないこと、部分的に認めたことを確認している。これは包括的な立場を反映している。その特徴は以下の通りである。

⑴ キリスト中心主義

宗教的排他主義と同じく宗教的包括主義も「救済」はキリスト論に基礎づけられている。だが宗教的排他主義との相違は、認識論的な意味においてではなく、存在論的な意味においてのキリスト論である。つまり宗教的排他主義ではキリストにおける神の恵みを認識することなしに「救済」に至ることはできないのであるが、宗教的包括主義においては、キリスト論的な意味での恵みを認識しなくても、すなわち福音を知らされてないがゆえにキリストの名を知らない者であっても、キリストの普遍的恵みが存在論的に「救済」を保証してくれる、という論理構造である。

⑵ 万民救済論

如何なる宗教でもその人が真剣に信じていれば、それなりに真理性を保有しているので、キリスト教の神に近づける可能性がある。よって「救済」は、その人が信仰を放棄しない限り、キリストにおける神の恵みによって成し遂げられる。但しこの場合の「救済」は、キリストにおける神の恵み、すなわち「聖霊」が普遍的な効力を持っているがゆえに、世界中の如何なる宗教であっても信仰に生きる者のすべてに施される、という意味である。

⑶ 上下関係

宗教的包括主義は、諸宗教の中に真理性を認める。しかしそれは、キリスト教が保有している真理の一部、あるいは不完全な形に過ぎないと解する。なぜならキリスト教は完全な真理を保有しているがため諸宗教に対して優位に立っている、と考えるからである。ゆえに諸宗教は、キリスト教の真理に「どの程度一致しているか」によって価値が計られる。したがって宗教的包括主義は、諸宗教に対して排他性に向かうのではなく包括性、すなわち「上下関係」へと置き換えられる。下部には諸宗教が、上部には諸宗教を統括する高次的存在としてのキリスト教が位置する。

3.3 宗教的多元主義

多元主義（pluralism）という言葉は、価値（倫理・道徳）多元主義、文化多元主義、民族多元主義などと多方面で使われている。これは、単に多数の価値、

文化、民族が在るということではなく、善悪の価値観などは民族・文化によって異なるという多元的見方である。宗教においても同様に、一元的にみることをやめて、「救済」は多数あるということを「そのまま」認めよう、という主張が宗教的多元主義である[21]。

宗教的多元主義は、世界的にも宗教の世俗化・多元化現象が進む現代にあって、自己の立場だけが真理であると主張する伝統的キリスト教の独善的な排他主義はすでに通用しないという認識に立つ。

従って一方では、グローバルな意識に示唆される方向で伝統的キリスト教の絶対主義を内部から解体し[22]、他方では、伝統的キリスト教が「天の父」と呼ぶ「神」を「超越的な究極リアリティ（the ultimate transcendent Reality that we call God）」[23] としての「神的実在（the divine reality）」、あるいは「実在者（the Real）」[24]（以後、神的実在に統一）と「呼び換え」て、宗教とはいずれもが神的実在に対するそれぞれの歴史や風土を踏まえた経験であり応答であると定義し、どの宗教にも真理性は存在していると説く「新しいキリスト教観（the new perception of Christianity）」[25]を構築する。これの代表的立場にあるのが J・ヒックであり、日本でのその立場の代表は八木誠一であり[26]、遠藤周作の小説『深い河』にも宗教的多元主義が表現されている[27]。その特徴は以下の通りである。

⑴　宗教的統合論

宗教的排他主義と宗教的包括主義が「救済」においてキリスト教の優越性を主張するのに対して、宗教的多元主義は「救済」の道はただ「一つ」、すなわちキリスト教だけではなく、「多数」あることを認める。よって宗教的多元主義は、宗教とは「神的実在に対する人間のさまざまに異なる応答である」[28] から、どの宗教も「本質的に同一（essentially the same）」[29]であると規定する。

⑵　非神話化

宗教的排他主義と宗教的包括主義は、イエスはキリストであり、キリストは「神の子」と同意語であり、三位一体論の「子なる神」を表わすという信念に立つ。しかし宗教的多元主義は、究極的リアリティーである神的実在の受肉はイエスのみに起こったことではない、イエスは三位一体の「子としての神ではない（not as literally himself God）」[30] という信念に立つ。

宗教的多元主義において、ナザレのイエスは、あくまでも「偉大な人間預言者（Jesus was a great human prophet）」[31]である。イエスは「中国の孔子、インドのゴータマやマハーヴィーラ、ペルシャのゾロアスターや、パレスチナのヘブライの預言者たち、そしてまた、ギリシアのピタゴラスやソクラテスやプラトンなど」と同じ「精神的教師たち（teachers）」[32] の一人であると認識する。よって「十字架に関するキリスト教の神話を受け入れることが全人類に唯一の救いの道である」という伝統的キリスト教のドグマは、宗教的多元主義からすれば「誤解（misleading）」[33] である。なぜならキリスト者たちが期待した終末は「何年たっても、何世代たっても、やってはこなかった」[34] からである。

以上から宗教的多元主義は、伝統的キリスト教が説く三位一体論やキリスト論、贖罪論、復活論、終末論らは、イエスの死後、イエスの弟子たち、すなわち「人間」による「労作（the story）」[35] であるから、十字架に関する「神話」は「メタファー（隠喩）」[36] として解釈する。

⑶　汎神論的立場

宗教的多元主義は、諸宗教を同格扱いする[37]。それがため、宗教的排他主義は伝統的キリスト教としての最終的・絶対的・普遍的な真理を保有しているという傲慢な態度は克服されるべきである、と考える。なぜなら諸宗教は、「独自の色形をしたレンズ」[38] を通して、唯一なる神的実在を「人格的アドナイ、天の父、アッラー、ヴィシュヌ、シバとして、あるいは非人格的なブラフマン、タオ（道）、ダルマカーヤ（法身）、シュニャーター（空）とか根底」[39]として具体的に「覚知」するよう神的実在によって導かれている[40]からである。つまり人格的神であっても、非人格的原理であっても、超越的な究極的リアリティーである神的実在は「一者（the Real *an sich* is one）」[41]であって、ただそれへの呼び名が各宗教に

よって異なる、「神は多くの名を持つ」[42]、あるいは「神は色々な顔を持っておられる」[43] だけである。ここにおいて神を立てない仏教も包含される。よって宗教的多元主義は汎神論的立場に立つ。

3.4 宗教的多元主義における問題

J・ヒックが提唱した宗教的多元主義論は、1980 年から 90 年代にかけて、キリスト教だけでなく、諸宗教の研究者らにもさまざまな反響を及ぼし、賛同者と批判者を生み出した。その是非をめぐる論争の焦点はさまざまである。本研究は、キリスト教的視点から三点に絞り、何が問題であるのかを考えてみたい。

⑴ 救済の曖昧さ

J・ヒックは「神はキリスト教の教会や礼拝堂のなかだけでなく、ユダヤ教の会堂、イスラム教寺院、シーク教寺院、ヒンドゥー教寺院のなかでも、異なりはしても重なる心像を介して礼拝されているという事実を知ることは、その神がまさしく人類全体の神（he is the God of all mankind）である」[44]、ただ各宗教によってそれへの呼び名が異なる（God has many names）だけで、すべての宗教は「救済」においては「本質的に同一（essentially the same）」[45] であると断言している。

また「キリスト教における神の像」が「阿弥陀信仰の仏教徒たちによっては真に礼拝されることがありえないと仮定する必要はない」[46]とも断言している。換言するならば、阿弥陀信仰の仏教徒が、キリスト教の神を真に礼拝することが「ありえる」ということである。つまり仏教徒が「南無阿弥陀仏」と称えている対象は、実は、キリスト教の「天の父」、すなわち「神という超越的な究極リアリティー（the ultimate transcendent Reality that we call God）」[47]であるから、ありえないと仮定する必要はない、という意味である。したがって J・ヒックの「救済」の論理構造においては、キリスト教の神と仏教の阿弥陀仏とは「代替可能」[48] となる。だから彼は、将来諸宗教は「自由に互いの礼拝を訪れ（freely visit one another’s worship）」、「やがて礼拝場所の共有（share places of worship）に踏みきることができるようになり」、「時には聖職者の交換説教（a degree interchange of ministries）をおこなうようにもなる」[49] と言明できたのである。

そして八木誠一も「イエスの「人の子」とパウロの「キリスト」とが、親鸞の「阿弥陀仏」に一致する。それらはすべて究極的なリアリティーから来て究極的なリアリティーを「救い主」の役割において表わしている。〔中略〕信者のうちで働く阿弥陀仏は、パウロの「私のうちにあるキリスト」と一致する」[50]、キリスト教と仏教は「本質的一致」[51]すると断言している。

以上のように宗教的多元主義は、信仰者の心理を除外した「救済」の理論で展開されている。しかし宗教とは、客観的「知」の立場以上に、主体的・献身的「信」の立場を第一とする [52]。たとえば、親鸞が「たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」[53] と、また使徒パウロがユダヤ教の立場[54] を認めた上で「十字架の言葉は、わたしたち救われる者には神の力です」（一コリン 1:18）と語った如く、救済される者にとって、救済する者への帰依は、東西を問わず「一途」（北森嘉蔵）[55] である。同時に「あれも　これも」ではなく、生死の問題として「この道しかない」と、どうしても独善的・排他的・包括的な態度をとるようになる。だから高田信良は「親鸞の選択的・排他的な姿勢は法然にしたがっているのである」[56]と述べ、ユルゲン・モルトマンも「ひとが選ぶことができるのはただ一つの宗教だけであること、つまり一つを信ずることは実存的に他の信仰を排除するものである」[57] と述べている。

たとえ J・ヒックや八木誠一の「救済」の論理構造において、キリスト教の神と阿弥陀仏は「代替可能」であろうとも、阿弥陀信仰の仏教徒においては、キリスト教の神は「摂取不捨」[58] ではないゆえに代替は「不可」である。各宗教は、他のものに交換できない固有の「救済」の論理構造をもっているからである。だからヴォルフハルト・パネンベルクは、宗教的多元主義の救済論の曖昧さを以下のように指摘している。

> ヒンドゥー教徒やシーク教徒が神に祈る時、彼らがキリスト教で礼拝される神と同じ神に祈

ろうと思っているかどうかを、われわれはどのようにして知るのであろうか。このことは、敬虔なイスラム教徒の場合でも明快ではない。というのは、われわれも部分的には同じ「伝統の蓄積」を共有しているとは言え、イスラム教徒が神に向かう態度は、ムハマンドを信ずる彼の信仰に規定されているからである。それでもなおこれは同じ神なのであろうか。[59]

⑵ 宗教的多元主義はキリスト教か

宗教的多元主義は、キリスト教内部から発せられた神学である。それにも拘らず、キリスト教の神にこだわることなく、イスラム教もヒンドゥー教も仏教も、如何なる宗教も信ずれば究極的なるリアリティーである神的実在に至れるとする。彼らは、この転向を「神学的なルビコン渡河（the crossing of a theological Rubicon）」[60] と呼んで、英雄的な行為として自画自賛している。J・ヒックは「ルビコン河という象徴は、選択可能な一方の道を閉ざして他方を開くような第一歩を踏み出すためにルビコン河を渡ることを意味する（the symbol of the river Rubicon, to cross which is to take a step that closes one range of options while opening another）」[61] と説明している。つまり宗教的排他主義や宗教的包括主義の岸から、宗教的多元主義の岸へと渡ることを指している。

だが日本においては数少ないキリスト者からするならば、先祖代々祀ってきた八百万の神々、あるいは仏や菩薩たちから、まったく異質である『聖書』の創造神、アブラハム・イサク・ヤコブの「一神」へと転換した行為こそが「ルビコン渡河」と言って相応しいのではないだろうか。したがって宗教的多元主義者は、一神教の岸から、多神教あるいは非人格的原理の岸に渡ったのであるから、彼らはもはや本来的な意味でのキリスト教とは呼べない、のではないだろうか。

ルビコン河を渡った J・ヒックは「密かにキリストの十字架に頼ることをせず（not secretly dependent upon the cross of Christ）」[62] 、キリスト教も「他の諸宗教と並ぶ、純正な一つの霊性の道（one authentic spiritual path among others）」[63] であると考えるべきだと力説している。だが聖地のないユダヤ教が、シャリーア（イスラム法）のないイスラム教などというものがあり得ないように、十字架のないキリスト教などというものもあり得えないのではないだろうか。

問題は、宗教的多元主義が「キリスト教を放棄することはない（not be to renounce Christianity）」[64]、また J・ヒック自身も「キリスト教徒である（I am myself a Christian）」[65] と発言しているにも拘らず、当の「救い主キリスト」が抜け落ちている、という点にある。

キリスト教とは、字義通り、神がたてた十字架で死んだナザレのイエスは神が派遣したキリストであると固く信じる教えである。そして「救済」は、キリストの贖罪論信仰による。よって神の絶対性は「キリストの出来事」の絶対性と切り離すことはできないのである。だから森本あんりは「多元主義者は、キリスト教の神に限定されないという彼らの神概念をどこから得るのであろうか」[66] と問うている。

⑶ 自己矛盾

宗教的多元主義は、宗教的排他主義を「古くてもっとも劣ったもの」であり、宗教的包括主義は排他主義と比べるならば「まだ優っている」と考える。なぜなら信仰にコミットしている人はすべて「無名のキリスト者（anonymous Christians、ドイツのカトリック司祭であり神学者であるカール・ラーナーが提唱した）」[67] として神の恵みに与っていると考えるからである。

だが、それでもキリスト教の優越性を前提としていることから、J・ヒックは宗教的包括主義を「古いドグマの内容がまだ十分には骨抜きされていない（the old dogma has not been so emptied of content as no longer to be worth affirming）」[68] と非難し、「これ（宗教的多元主義：筆者挿入）は包括主義の指し示すよりも一層すすんだ結論を受け入れるものとみなしうる（this can be seen as an acceptance of the further conclusion to which inclusivism points）」[69] と宗教的多元主義を三者間でもっとも「優」的存在と見做している。

問題は、人格神・神々であっても、また非人格的原理であっても、すべての宗教を「平等」にみる、

すなわち「われわれの究極的な救い」[70]は「一」なる神的実在の導きによるのであるから、どの宗教も「みな同程度の価値（all on the same level of value）」[71]をもっている、というのが宗教的多元主義の信念であるにも拘らず、J・ヒックは宗教を「排他主義＜包括主義＜多元主義」と、つまり「劣」から「優」へという序列、すなわち差別化して、自らの信念に対し意識せずに反してしまっている点にある。換言するならば、表立った信念の表明の裏側に、実は、古い序列の信念が J・ヒックにまだ残っていて、それがこの序列に現われたのである。

5. おわりに

客観的「知」の立場に立って、諸宗教の「平等」を主張してきた J・ヒックの宗教的多元主義は、他宗教への偏見と差別を払拭させ「寛容に至らせる（to learn to tolerate）」[72]、世界平和実現のためには必要な論理であると、ユニテリアン[73]をはじめとして、わが国のような習合宗教の徒には馴染みやすい側面から、賛成する人は多い。

しかし、はじめに、イエスを三位一体の「子としての神」、すなわち「キリスト」と受けとめない J・ヒックの宗教的多元主義は、果たして、本来的な意味においての、キリスト教と呼べるのであろうか。つぎに、神を立てる・立てないという、まったく相反する教理をひとりの人間において「同時」に両立させることが、実際に、でき得るのであろうか。第三に、すべての宗教が、クリスチャンが「天の父」と呼ぶ、J・ヒックのことばでは「神的実在」を拝しているのであるならば、仏教徒であることの必然性は「どこ」で見出されるのであろうか。第四に、日本では宗教は世俗化現象の只中にあるが、このような状況においてどの宗教も「本質的には同一」であると説く J・ヒックの宗教的多元主義は、人びとにどの宗教も「同じ」であるならば、どの宗教も「選ばない」、宗教なしでも困りはしないという「無宗教」を選択させ、宗教の世俗化に歯止めが利かなくなるのではないだろうか、といった疑問は残る。

それは、J・ヒックが提唱した宗教的多元主義が、諸宗教をその宗教自身の自己理解に適切な方法で理解しようとしたのではなく、彼の主張である「一」なる「神的実在」中心主義に諸宗教を組みいれて理解しようとした点に問題があるからである。

従って今後検討される課題においては、現実においての、宗教の多元化を認めた上で、それぞれの宗教が「救済」において、自身が果たすべき社会的役割と価値とを、諸宗教の「同一」性からではなく自身が「唯一」であること（実存）から理解することが重視されなければならない。よって本研究は、今後の諸宗教はそれぞれの「唯一性」、つまり固有の歴史、聖典、儀礼、信条などを尊重し合えるような学的探究の地平を追及していくことが重要となろう、と考える。

【参考文献】

John Hick, “ Philosophy of Religion”, PRENTICE-HALL, INC, New Jersey, 1973.

John Hick, “ GOD HAS MANY NAMES ”, The Westminster Press Ltd, London, 1980.

John Hick, “ Problems of Religious Pluralism ”, Macmillan, London,1985.

John Hick and Paul F Knitter, “The Myth of Christian Uniqueness ”, SCM Press Ltd , London, 1987.

John Hick, “ The Metaphor of God Incarnate”, SCM Press Ltd, London, 1993.

John Hick, “ The Second Christianity ”, SCM Press Ltd, London,1994.

C. S. Lewis, “MERE CHRISTIANITY”, Collins, London, 2012.

Gavin D’Costa editor, “Christian Uniqueness Reconsidered”, Orbis Books, New York, 1990.

稲垣久和『哲学的神学と現代』ヨルダン社、1997.

稲垣久和『公共の哲学の構築をめざして　―キリスト教世界観・多元主義・複雑系』教文館、2001.

ヴォルテール、中川信訳『寛容論』中央公論新社、2016.

エリアーデ・ミルチア、柴田史子訳『世界宗教史４』筑摩書房、2009.

遠藤周作『私にとって神とは』光文社、1997.

遠藤周作『深い河』講談社、2000.
遠藤周作『『深い河』創作日記』講談社、2000.
小田垣雅也『ロマンチズムと現代神学』創文社、1992.
金子大栄校注『歎異抄』岩波書店、1931.
岸根敏幸『宗教多元主義とは何か　―宗教理解への探究―　』晃洋書房、2006.
北森嘉蔵『現代宗教講座第 I 巻　人はなぜ宗教を求めるのか』創文社、1954.
コックス・ハーヴィー、塩月賢太郎訳『世俗都市』新教出版社、1971.
杉田俊介「ユニテリアン宣教師ナップにおける日本宗教間 : 宗教多元主義との関連で」『現代キリスト教思想研究会』第 7 号、京都大学、2009.
瀧澤克己『佛教とキリスト教』法蔵館、1999.
武田龍精編『比較を越えて　宗教多元主義と宗教的真理　阿弥陀仏とキリスト・浄土と神の国』龍谷大学仏教文化研究所、1997.
デコスタ．G 編、森本あんり訳『キリスト教は他宗教をどう考えるか　ポスト多元主義の宗教と神学』教文館、1997.
トレルチ. エルンスト、深井智朗訳『キリスト教の絶対性と宗教の歴史』春秋社、2015.
ドラモンド．RH、田中友敏訳『多元化時代の宗教』ヨルダン社、1991.
永見勇『象徴としての宗教』創文社、1993.
南山大学監修『公会議公文書全集Ⅶ』中央出版社、1967.
ヒック・ジョン、間瀬啓允訳『宗教の哲学』培風館、1975.
ヒック・ジョン、間瀬啓允訳『神は多くの名前を持つ』岩波書店、1986.
ヒック・ジョン、間瀬啓允　渡部信訳『もうひとつのキリスト教――多元主義的宗教理解』日本基督教団出版局、1989.
ヒック・ジョン、間瀬啓允訳『宗教多元主義―宗教理解のパラダイム変換―』法蔵館、1990.
ヒック・ジョン+ニッター・ポール・F 編、八木誠一+樋口恵訳『キリスト教の絶対性を越えて――宗教的多元主義の神学』春秋社、1993.
ヒック・ジョン、間瀬啓允訳『宗教がつくる虹』岩波書店、1997.
ヒック・ジョン、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999.
ヒック・ジョン、間瀬啓允訳『ジョン・ヒック自伝　―宗教多元主義の実践と創造―』トランスビュー、2006.
ヒック・ジョン、若林裕訳『神とはいったい何ものか　次世代のキリスト教』新教出版社、2014.
古田和弘『涅槃経―「わたし」とは何か―』真宗大谷派宗務所出版部、2008.
古屋安雄『現代キリスト教と将来』新地書房、1984.
古屋安雄『宗教の神学――その形成と課題』ヨルダン社、1985.
星川恵慈ほか 5 名『現代世界と宗教の課題』蒼天社出版、2005.
星川恵慈『宗教と＜他＞なるもの　言語とリアリティをめぐる考察』春秋社、2011.
マイタス・門脇佳吉・井上英治編『宗教の対話』創文社、1973.
間瀬啓允・稲垣久和編『宗教多元主義の探究―ジョン・ヒック考―』大明堂、1985.
間瀬啓允『現代の宗教哲学』勁草書房、1993.
間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008.
峯岸正典「わがこととしての宗教間対話――東西霊性交流の経験から――」『宗教研究の現在』中央評論、2007.
八木誠一『パウロ・親鸞＊イエス・禅』法藏館、1983.
ルイス．C.S、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、1983.
ルイス．C.S、鈴木秀夫訳『キリスト教の世界』大明堂、1994.

【脚注】

[1] ヒックの理論は宗教多元主義における一つの在り方であってそれ以外にもある。その代表としてヒックの神中心主義に真っ向から対立しているジョン・B.カブ・Jr がいる。G. デコスタ編、森本あんり訳『キリスト教は他宗教をどう考えるか　ポスト多元主義の宗教と神学』教文館、1997、pp.121-148. Gavin D’Costa editor, “Christian Uniqueness Reconsidered”, Orbis Books, New York, 1990, pp.81-95.

2) ヘーゲルの抱いた考えは汎神論と呼ばれ、神は善と悪を越えているという考えである。彼は絶対的哲学を啓示宗教であるキリスト教の上位に置いている。C.S.ルイス、鈴木秀夫訳『キリスト教の世界』大明堂、1994、p.43.

3) C・S・ルイス、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、1983、pp.5-7. C. S. Lewis, “MERE CHRISTIANITY”, Collins, London, 2012, pp.iv-x.

4) C・S・ルイス、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、1983、pp.77. C. S. Lewis, “MERE CHRISTIANITY”, Collins, London, 2012, p.40.

5) 古屋安雄『宗教の神学』ヨルダン社、1985. p.51.

6) ハーヴィー・コックス、塩月賢太郎訳『世俗都市』新教出版、1971、p.40.

7) C・S・ルイス、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、1983、p.71. C. S. Lewis, “MERE CHRISTIANITY”, Collins, London, 2012, p.35.

8) 南山大学監修『公会議公文書全集 Ⅶ』中央出版社、1967、p.355.

9) 古屋安雄『宗教の神学』ヨルダン社、1985、pp.188-191.

10) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『ジョン・ヒック自伝 ―宗教多元主義の実践と創造―』トランスビュー、2006、p.51.

11) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『神は多くの名を持つ』岩波書店、1986、p.213.

12) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『ジョン・ヒック自伝―宗教的多元主義の実践と創造―』トランスビュー、2006、p.179.

13) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『ジョン・ヒック自伝―宗教的多元主義の実践と創造―』トランスビュー、2006、p.179.

14) 西谷幸介「宗教多元主義は日本人の無宗教的現状を肯定するイデオロギーではない」、間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008、p.60.

15) 梅津光弘 間瀬啓允 稲垣久和編『宗教多元主義の探求―ジョン・ヒック考―』大明堂、1985、p.116.

16) 第一類型「文化と対立するキリスト」、第二類型「文化のキリスト」、第三類型「文化上のキリスト」、第四類型「矛盾の中のキリストと文化」、第五類型「文化の変革者キリスト」、キリスト教を諸宗教の変革媒体として捉える立場。H・リチャード・ニーバー、赤城泰訳『キリストと文化』日本基督教団出版局、1967.

17) 古屋安雄『宗教の神学』ヨルダン社、1985、p.318.

18) 小田垣雅也『ロマンチズムと現代神学』創文社、1992、pp.161-173.

19) 岸根敏幸『宗教多元主義とは何か――宗教理解への探求――』晃洋書房、2006、p.11.

20) 杉田は「A・レイスによる多元主義は、キリスト教の特権性を否定し、キリスト教も他の宗教と同列であるとすることによって、宗教の多様性を容認しようとする立場」であると解説している。杉田俊介「ユニテリアン宣教師ナップにおける日本宗教間:宗教多元主義との関連で」『現代キリスト教思想研究会』第 7 号、京都大学、2009、p.87.

21) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教多元主義 宗教理解のパラダイム変換』法蔵館、1994、p.70. John Hick, “ Problems of Religious Pluralism ”, Macmillan, London,1985, p. 34.

22) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.195. John Hick, “ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.152.

23) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.3. John Hick, “ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.ix.

24) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.173. John Hick, “ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.134.

25) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.107. John Hick, “ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.80.

26) 「八木は第一類型からはっきりと第三類型へ転向した」、古屋安雄『宗教の神学』ヨルダン社、1985. p.327.

27) 遠藤周作『『深い河』創作日記』講談社、2000、pp.23-24.

28) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『神は多くの名を持つ』岩波書店、1986、p.11. John Hick, “ GOD HAS MANY NAMES ”, The Westminster Press Ltd, London, 1980, p.19.

29) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『神は多くの名を持つ』岩波書店、1986、p.97. John Hick, “ GOD HAS MANY NAMES ”, The Westminster Press Ltd, London, 1980, p.63.

30) ジョン・ヒック+ポール・F・ニッター、八木誠一+樋口恵訳『キリスト教の絶対性を越えて――宗教的多元主義の神学』春秋社、1993、p.209. John Hick and Paul F Knitter, “The Myth of Christian Uniqueness ”, SCM Press Ltd , London, 1987, p.163.

31) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.195. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.152.

32) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.127. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, pp .95-96.

33) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.172. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.135.

34) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.32. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.19.

35) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.38. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.25.

36) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.24. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.12

37) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.174. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.135.

38) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.182. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.141.

39) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.182. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.141.

40) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.182. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.141.

41) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教多元主義 宗教理解のパラダイム変換』法蔵館、1994、p.79. John Hick, “ Problems of Religious Pluralism ”, Macmillan, London,1985, p. 40.

42) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『神は多くの名を持つ』岩波書店、1986. John Hick, “ GOD HAS MANY NAMES ”, The Westminster Press Ltd, London, 1980.

43) 遠藤周作『深い河』講談社、2000、p.196.

44) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.xii. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.9.

45) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『神は多くの名を持つ』岩波書店、1986、p.97. John Hick, “ GOD HAS MANY NAMES ”, The Westminster Press Ltd, London, 1980, p.63.

46) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『神は多くの名を持つ』岩波書店、1986、p.122. John Hick, “ GOD HAS MANY NAMES ”, The Westminster Press Ltd, London, 1980, p.78.

47) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.3. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.ix.

48) ジョン・ヒック、堀江宗政訳「自分史」『宗教多元主義への道―ジョン・ヒック考―』大明堂、1985、p.5.

49) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『神は多くの名を持つ』岩波書店、1986、p.121. John Hick, “ GOD HAS MANY NAMES ”, The Westminster

Press Ltd, London, 1980, p.77.

50) ジョン・ヒック+ポール・F・ニッター、八木誠一+樋口恵訳『キリスト教の絶対性を越えて――宗教的多元主義の神学』春秋社、1993、pp.267-268. John Hick and Paul F Knitter, “The Myth of Christian Uniqueness ”, SCM Press Ltd , London, 1987, p.133.

51) 八木誠一『パウロ・親鸞＊イエス・禅』法藏館、1983、p.4.

52) 仏教における「行道の構造は、いずれも最初に信が語られ、最後に慧が明かされて、その中間に出家者と在家者の別があるとしても、諸種の行業が説かれているわけで、それは基本的には、信、行、慧という行道」である、「たとえ歴史、社会、文化が変わっても、仏教における何れの経典、何れの宗派が説くところの仏道においても、原理的には、その行の内容は異なるとしても、それらはすべて、このような信、行、慧なる構造を原型とすることに変わりはない」。武田龍精「宗教多元主義と真理証言　―親鸞浄土教の課題―」、武田龍精編『比較を越えて　宗教多元主義と宗教的真理　阿弥陀仏とキリスト・浄土と神の国』龍谷大学仏教文化研究所、1997、p.40.

53) 金子大栄校注『歎異抄』岩波文庫、1931、p.40.

54) 「申命記」第 21 章には「木にかけられた者はすべて呪われる」と記されている。

55) 北森嘉蔵「神はあるか」、『現代宗教講座第 I 巻　人はなぜ宗教を求めるのか』創文社、1954、p.53.

56) 高田信良「仏教研究から見た宗教多元主義」、間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008、 p.150.

57) G. デコスタ編、森本あんり訳『キリスト教は他宗教をどう考えるか　ポスト多元主義の宗教と神学』教文館、1997、p.208. Gavin D’Costa editor, “Christian Uniqueness Reconsidered”, Orbis Books, New York, 1990, p.155.

58)「摂取（おさめとり）して、捨てることがない」金子大栄校注『歎異抄』岩波文庫、1931、p.41.

59) G. デコスタ編、森本あんり訳『キリスト教は他宗教をどう考えるか　ポスト多元主義の宗教と神学』教文館、1997、p.162. Gavin D’Costa editor, “Christian Uniqueness Reconsidered”, Orbis Books, New York, 1990, p.103.

60) ジョン・ヒック+ポール・F・ニッター、八木誠一+樋口恵訳『キリスト教の絶対性を越えて――宗教的多元主義の神学』春秋社、1993、p.42. John Hick and Paul F Knitter, “The Myth of Christian Uniqueness ”, SCM Press Ltd , London, 1987, p.viii.

61) ジョン・ヒック+ポール・F・ニッター、八木誠一+樋口恵訳『キリスト教の絶対性を越えて――宗教的多元主義の神学』春秋社、1993、p.42. John Hick and Paul F Knitter, “The Myth of Christian Uniqueness ”, SCM Press Ltd , London, 1987, p.16.

62) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.116. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.88.

63) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.26. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, pp.13-14.

64) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.195. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.152.

65) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教多元主義　宗教理解のパラダイム変換』法藏館、1994、p.65.　John Hick, “ Problems of Religious Pluralism ”, Macmillan, London,1985, p. 31.

66) G. デコスタ編、森本あんり訳『キリスト教は他宗教をどう考えるか　ポスト多元主義の宗教と神学』教文館、1997、p.321.

67) カール・ラーナー、稲垣良典訳『人間の未来と神学』中央出版社、1975、pp.93-100.

68) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教多元主義　宗教理解のパラダイム変換』法藏館、1994、p.69. John Hick, “ Problems of Religious Pluralism ”, Macmillan, London,1985, p. 33.

69) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教多元主義　宗教理解のパラダイム変換』法藏館、1994、p.69. John Hick, “ Problems of Religious Pluralism ”, Macmillan, London,1985, p. 34.

70) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教多元主義　宗教理解のパラダイム変換』法藏館、1994、p.78. John Hick, “ Problems of Religious Pluralism ”, Macmillan, London,1985, p. 39.

71) ジョン・ヒック、間瀬啓允訳『宗教多元主義　宗教理解のパラダイム変換』法藏館、1994、p.121. John Hick, “ Problems of Religious Pluralism ”, Macmillan, London,1985, p. 67.

72) ジョン・ヒック、間瀬啓允／本多峰子訳『宗教多元主義への道』玉川大学出版部、1999、p.189. John Hick,“ The Metaphor of God Incarnate ”, SCM Press Ltd, London,1993, p.147.

73) ペラギウス（360-420）が、三位一体論やキリスト神性論を否定して、神の単一性（unity）のみを主張したことから、イエスを宗教的指導者としては認めても、神としての超越性は否定する主義者をユニテリアンと呼ぶ。

日本国際情報学会誌『国際情報研究』15 巻 1 号【研究論文】 2018 年 12 月 23 日発行

「よい good」の分析について
—ヘアの理論の批判的検討—

磯部 笑子
日本大学文理学部哲学科

On the Analysis of ‘Good’
—The Critical Consideration of the Theory of R. M. Hare—

ISOBE Emiko
Department of Philosophy, College of Humanities and Sciences, Nihon University

The ethical theories of R. M. Hare are divided into early and later stages. In the early stage, more concretely, in his *The Language of Morals* (1952), he pointed out properties of prescriptivity and universalizability which moral terms such as ‘good’, ‘right’, and ‘ought’ had. According to him, moral terms, especially ‘ought’, have prescriptive meaning as commands or imperatives, and such prescription can be universalized. In Part 2 of his book, Hare pointed that the primary meaning of ‘good’ was commendation.

In this paper, I consider Hare’s analysis of ‘good’. First, I outline his analysis of moral terms (§1, §2, §3). Next, I explore the consideration of ‘good’ given by P. T. Geach and J. L. Mackie, by which it turns out that Hare’s analysis of ‘good’ should be actually considered in level of illocutionary acts that was introduced by J. L. Austin in his *How to Do Things with Words* (1955) (§4 and §5). Finally, I give the new analysis of other several uses of ‘good’ from the point of view of the speaker’s intention (§6).

1.はじめに

倫理学においては、しばしば「何がよいことなのか」という倫理的な価値判断の基準と、「我々は何をなすべきか」という行為の規範が、絶対的、普遍的なものではなく、共同体や歴史に対して相対的であると見なされてきた。それに対して、ヘア（Hare, R.M.）は、道徳判断を行う際に用いられる「道徳言語」を分析することにより道徳判断の普遍化可能性 universification を導き出し、さらには、各人の利益が衝突する状態を解決するために選好功利主義 preference utilitarianism 理論を提唱した。ヘアの道徳理論は、道徳言語の分析を行った『道徳の言語』（1952）[1] の時期（前期）と、「相手の立場に立つ」選好功利主義を展開した『道徳的に考えること』（1981）の時期（後期）に区分される。前期に位置づけられる道徳言語の分析では、「よい good」、「正しい right」、「べき ought」という道徳語の意味・役割が分析され、そこから指令主義 prescriptivism[2] が導かれ、指令主義に基づいて道徳判断の普遍化が可能であることが主張された。また、後期に提案された「相手の立場に立つ」という理論では、各人の利益の衝突を選好功利主義によって解決する道筋が示された。

〈「よい」には「勧める」、「指令する」という意味 meaning がある〉という見解から普遍化可能性を導くヘアの議論は、「よい」という語を用いた発話によって否応なく「指令する（指図する）」という行為が遂行されることになるような、「よい」という語の使用に関わる社会的慣習ないしは制度があると想定しない限り成立しないように思われる。ヘアが、「よい」の意味として指令があるとする際に、仮に発話者や聞き手の意図が考慮されているとすれば、普遍化は不可能であろう。「よい」の意味としての指令が、制度的・慣習的なもの（意味論的な取り決め）であるからこそ、普遍化が可能となる。以上のように考えれば、ヘアのこの分析は、後にオースティンがその言語行為論で分類したところの「発語内行為 illocutionary act」として理解すべきことのように

思われる。すなわち、発話者は「よい」という語を用いた発話によって「推奨する」ないしは「指令する」という発語内行為を遂行していると考えるべきなのである。

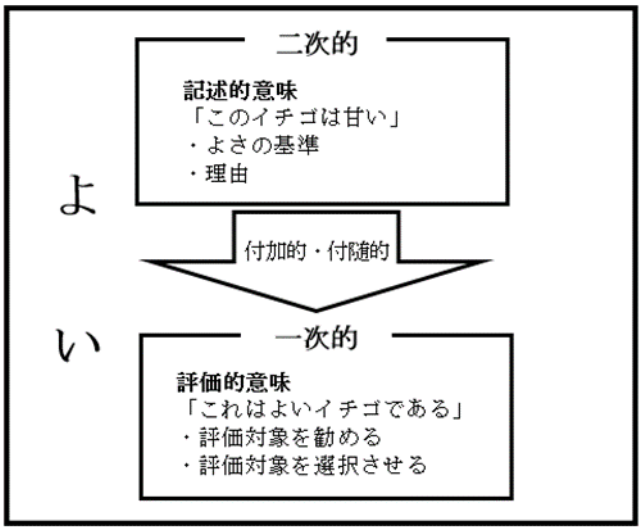
ところが、ヘアは、『道徳の言語』において、「よい」が皮肉の意味で用いられることがあるとも述べている。また、後期の著作『道徳的に考えること』の中では、「すべての道徳判断が評価的あるいは指令的であるわけではない（なかには、自分が支持するわけではないが、一般的に受け入れられている標準に表面的に従っているだけ、というような判断もある）。」（MT p. 22, 邦訳 p. 34）と述べており、「よい」の意味を推奨ないしは指令と断定的に捉えようとする前期での強い主張が後期では弱められている[3]。

本稿では、「よい」についてのヘアの分析に、発語内行為として理解すべき側面があることを指摘する一方で、「よい」という語を用いた文が発話される際にヘアが発話者の意図を考慮しているように理解される側面もあることを指摘したうえで、「よい」という語を用いた文が発話されるときの意図の多様性を明らかにすることを目的とする。こうした考察を経て、ヘアの指令主義から道徳判断の普遍化可能性は導かれないことが明らかになる。

2.「よい」の意味

ヘアによれば、道徳判断の一般的な形は、「よい」、「正しい」、「べき」という道徳語を用いたものとなる。以下では、まずヘアによる道徳語の分析を概観する。「よい」と「べき」には、いくつもの「よい」と「べき」を適用しうる事例があるが、「正しい」には、それを適用しうる事例はさほど多くない。「よい」には最上級の「最もよい best」という語があるが、「正しい」には「最も正しい rightest」という言い方はなじまない[4]。また、「よい」は様々な名詞を修飾することができるが（「よい絵画」、「よいイチゴ」等々）、「正しい」には修飾できない名詞がいくつも存在する（「正しい絵画」、「正しいイチゴ」等々）。こうした区別はあるが、それでもヘアは、「『よい』、『正しい』、『べき』という語の間には、私たちがそれらをすべて価値語として分類するのに十分な類似性がある」と述べている（LM p. 153, 邦訳 p. 202）。「よい」と「正しい」を比較すると、指令機能（prescriptive function）[5]に相違はあるにしても、「よい」がもつ機能を「正しい」や「べき」の機能のうちにも見出すことができるというのである。例えば、「君はそんなにうまく well 操縦しなかった」は「君は全く正しくは操縦しなかった」ということができるし、「君はクラッチをもっと静かに入れるべきである」を「もし君がクラッチをもっと静かに入れたとしたら、もっとよかったことであろう」ということもできる（LM pp. 152-153, 邦訳 pp. 201-202）。こうした類似性をより深く理解するために、ヘアは「よい」「べき」「正しい」の特性について分析を試みており、その中でも「よい」については、一般的な「よい」と道徳的文脈における「よい」を区別して詳述した。

ヘアによれば、「よいイチゴ」という価値判断がなされたとき、この「よい」には以下の図に記したような働きがある。



【図１】

ヘアは、「よい」には記述的意味 descriptive meaning と評価的意味 evaluative meaning があり、前者は後者に対して付加的という関係にあると考えた。対象物を「よい」と評価することが一次的であり、その評価に対して記述的な意味を与えることは二次的な役割を担っているというのである[6]。我々が通常、何かを「よい」と判定するとき、それを他

人に勧めることができなければ、それを「よい」とは言わないであろう（評価的意味）。この勧めは、他者の「選択」を導くものであり、指令的・普遍的である。我々が「よい」対象を人に勧めるときには、その対象の選択を指令しているのである。また、「よい」の基準は人それぞれではあるが、人が「～はよい」と判断したときには必ずその判断基準が存在している（記述的意味）。イチゴについてのよい基準とは、人によってはより赤いことであるかもしれないし、より甘いことであるかもしれない（それぞれのイチゴについての記述に対して同意をしながら別のイチゴを買うこともありうるが、評価に同意をしていながらそのイチゴを買わなければ奇妙であるとヘアは考えている[7]）。それぞれその判定基準は異なるが、「判定基準」と「勧め」は密接に関係しているといえる。そしてこの「よい」の判定基準は文脈に対して相対的である。「よいイチゴ」とは、「赤いイチゴ」であるかもしれないし、「甘いイチゴ」であるかもしれない。あるいは、イチゴを栽培して出荷し生計を立てている人にとっては、「よいイチゴ」とは「赤くて大きく売り物になるイチゴ」のことかもしれない。このように、「判定基準」は文脈に対して相対的であり、判定するためにはその都度「目的」が必要となる。ところが、「なぜよいか」と訊かれたときに（文脈に応じてであるが）「赤いからよい」、「甘いからよい」と答えた場合、それぞれの文脈では「赤いイチゴはすべてよい」、「甘いイチゴはすべてよい」という原理にしたがって価値判断をしていることになる。つまり、「このイチゴはよい」と判断するとき、我々はその都度普遍的な原理に導かれているのである。

それでは、「よい」が人ないしは人の行為について用いられる場合（道徳的脈略）はどうであろうか。ここで重要なことは、人についての「よい」、「悪い」は事物の「よい」、「悪い」とは異なる意味をもつことである。その理由として、ヘアは次の三つを挙げている。一つ目は、それ自体が善いことを意味する「内在的善」と、それ自体が何か別の目的のために善いとされる「道具的善」との相違である。二つ目の理由は、「人を道徳的によいものにする性質が精密時計をよいとする性質とは明白に異なっている」（LM　p. 140,　邦訳 p. 185）ことである。そして三つ目の理由は、「道徳的善」には尊厳があり、より重要であり、人々の関心事だということである。ヘアは、「私たちは、精密時計が精密時計であることよりも、人間がよい人間であることに重要性を与えている」（LM　p. 140,　邦訳 p. 185）と言う。というのも、精密時計が悪いからといって精密時計を非難はしないが、人が悪い場合には非難することがあるからである。

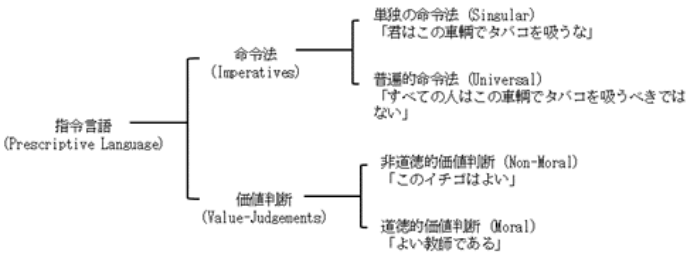
ところが、評価的意味と記述的意味の関係については、「よい」が人の行為について用いられる場合も、イチゴの場合と同様である。我々が「よい人」と言う場合には、「よい」という評価的意味と、「よい」と他人に勧めるための記述的な意味とがある。それはイチゴの場合と同様、評価する人それぞれの価値基準があり、「よい人」は優しい人であるかもしれないし、親切な人であるかもしれない。また、頭のよい人であるかもしれないということである。

この節の最後に、「よい」は「勧め」の意味をもたずに用いられる場合があることに注意を促しておきたい。それは、「引用符付の用法 inverted-commas use」である。引用符付の用法とは、「一般の人々が認めている基準に従うために」自分の価値判断ではなく他人の価値判断に基づいて「よい」と言う場合である（LM　pp. 124-126,　邦訳 pp. 163-166）。この場合には、そのもの・事柄を勧めていないばかりか、皮肉の意味が込められていることもある。また、他人が「よい」と評価しているがために、慣用的に（お世辞として）「よい」と言うこともある。これは、ヘアによれば、「慣用的用法 conventional use」である。この場合は、（権威のある）他人からその人の判断基準を教えられたため、その対象について自分もよいと考えていることを示すことによって侮蔑されないようにしようと思って「よい」と評価しているのであり、口先だけのことである。

3.指令性と普遍化可能性

ヘアによれば、道徳語には、「指令性」という言語的特性がある。道徳的行為についての問いは、「なにをなすべきか」ないしは「どのようにすればよいだろうか」というような形でなされる。そして、その

問いに対する答えとしては、「べき」、「よい」、「正しい」という道徳語が使われるのが普通である。このような問いは、行為や選択についての問いであるから、人はどのような行為をして、何を選択するのかを決定しなければならない。ヘアは、「私たちがある人について「彼の道徳原理は何であろうか」と問うとしたら、最も確実に正しい解答が得られる方法は、彼が行ったことを調べてみることであろう」（LM p. 1,　邦訳 p. 2）と述べ、価値判断や道徳判断が行為と選択を導くものであると考え、このような働きは、道徳語のもつ言語的特性としての指令的意味によるとした。このような道徳語は、以下のように分類される[8]（LM p. 3,　邦訳 p. 5）。



【図２】

ヘアによれば、価値判断を下す際には、なんらかの理由に基づいていなければならない。そして、その理由は原理に拠っている。まったく同じ絵が二つあるとして、片方を「よい絵」と判断しておきながら、もう一方を「よくない絵」と判断することはできない。二つのリンゴのうち、片方を「よいリンゴ」と判断しておいて、もう一方を「よくないリンゴ」と判断するのであれば、そのように判断するリンゴの違い（理由）がなければならない。そして、「このリンゴ」について評価するのであれば、その理由として「この種のリンゴすべて」についての普遍的な原理が存在するはずである。上記の表において、「単独の命令法」として「君はこの車輌でタバコを吸うな」という例を、また、「普遍的命令法」として「すべての人はこの車輌でタバコを吸うべきではない」という例を挙げた。「君はこの車輌でタバコを吸うな」という命令法の場合は、その理由として「タバコが嫌いだから」とか「今だけいけない」などという個別的な理由を挙げることができる。この場合、（この車輌と同じ条件の）別の車輌でタバコを吸ってはいけないかどうかは問題にされていない。これに対して、「すべての人はこの車輌でタバコを吸うべきではない」の場合、普遍的な理由を挙げることができなければならないし、理由が同じであれば同じ価値判断が下されなければならない（同じ条件の別の車輌でタバコを吸ってもよければ奇妙である）。つまり、「単独の命令法」は限定的であるが、「普遍的命令法」の場合は、個別の時間や場所に限定されず、全称的でなければならないのである。

4.ギーチ（Geach, P.T.）の見解

ギーチは、論文「よいと悪い」（1956）において、形容詞を「修飾的 attributive 形容詞」と「述定的 predicative 形容詞」の 2 種類に分類することができると考えた。前者の修飾的形容詞とは、形容詞Ａが名詞Ｂを修飾している「an ＡＢ」という名詞句において、形容詞Ａと名詞Ｂを「is Ａ」と「is a Ｂ」という二つの述語に分割することができず、「an ＡＢ」が一体となって述語「is an ＡＢ」を構成すると考えられるような形容詞Ａ（すなわち、形容詞Ａが後続の名詞を修飾していると見なされるような形容詞）のことである。それに対して、後者の述定的形容詞とは、「an ＡＢ」という名詞句において、形容詞Ａと名詞Ｂを「is Ａ」と「is a Ｂ」という二つの述語に分割することができるような形容詞Ａ（すなわち、形容詞Ａは述語論理のレベルでは後続の名詞を修飾しているとは見なされない―変項 x の性質を直接規定している―ような形容詞）のことである。ギーチは、修飾的形容詞の例として「大きい big」と「小さい small」を挙げている。例えば、「大きい蚤がいる」と「小さい象がいる」は、記号化するとそれぞれ「∃xGx」（Gx：x は大きい蚤である）、「∃xHx」（Hx：x は小さい象である）となるのであって、決して、∃x（Ｂx∧Ｆx）〔Ｂx：x は大きい、Ｆx：x は蚤である〕、∃x（Ｓx∧Ｅx）〔Ｓx：x は小さい、Ｅx：x は象である〕とはならない。なぜならば、一般的に、蚤は小さく、象は大きいと考えられており、「大きい蚤」とは「蚤としては大きい」ということであり、「小さい象」は「象としては小さい」ということだからである。それに対して、「赤い本がある」

のような文にあらわれている「赤い本」は、∃x（Rx∧Bx）〔Rx：x は赤い、Bx：x は本である〕というように二つの述語に分割可能であるので、「赤い」という形容詞は、この場合は見かけ上は「本」を修飾しているが、実は述定的な形容詞なのである。

以上のような準備的考察に続いて、ギーチは、「よい good」と「悪い bad, evil」という形容詞が本質的に修飾的な形容詞であることを論証しようとしている。彼は、まず日常言語における「よい（悪い）」について考察している。それによれば、外見上は述定的な形をしている「Aさんはよい（悪い）」という文が意味することは、実は「AさんはよいXだ」ということであり、例えば「Aさんはよい人だ」とか「Aさんはよい鹿のハンターだ」等々のようなことを意味しているというのである。続いてギーチは、倫理学における客観主義 objectivism について批判的検討を加えている。倫理的客観主義によれば、倫理的な善、倫理的な悪という性質は、世界の側に存在する客観的性質であるので、（もちろん、その性質をどのように知覚・認識するのかという大問題があるが）、「Aさんは（倫理的に）善い人だ」という文法的には修飾的に「善い」が用いられている場合であっても、「Ga∧Ma」〔Gx：x は（倫理的に）善い、Mx：x は人である、a：Aさん〕というように、述語を二つに分割可能であることになる。つまり、「（倫理的に）善い」という性質をAさん自身がもつ客観的性質と考えるのである。客観主義の立場をとるタイプの快楽主義や自然主義では、「快は善である」というような発話における「善である」は、当然のことながら述定的だと見なされる[9]。それに対して、ギーチは、そのような考えはムーアが指摘した「自然主義的誤謬」を犯すものだとして、あっさりと却下した上で、客観主義者に残された道は「善い」を定義不可能な非自然的属性と見なすことだと言う。ところが、「ある属性が非自然的であるとはいかなることであるかについて、整合的で理解可能な説明を与えた者はいない」（p. 35）のであり、こうして（ギーチによれば）直観 intuition によって客観的な性質である「善い」を見抜くことができるとするムーアのような倫理的客観主義も全面的に否定される。ムーアのようなタイプの客観主義者に対するギーチの上述の批判は的を射たものであろうが、「快は善である」のような発話を、自然主義的誤謬として却下するギーチの議論は、以下の理由により適切とは思われない。

ムーアが「善い」を自然的なものによって定義することは自然主義的誤謬を犯すことになると主張して以来、自然主義者は旗色が悪かったが、ムーアが「善い」の定義不可能性について展開している議論では、何が善いか（善いものは何か）ということまでが判別不可能だとされているわけではない。つまり、「快は善である」のような総合的判断がなされる可能性まで否定されているわけではないのである（もしそれまで否定されていたら、我々は直観によっても何が善であるかわからないことになってしまう）。ムーアの見解では、∀x（Px↔ Gx）〔Px：x は快である／快い、Gx：x は善い〕というような、「善い」の必要十分条件を与えるような主張に対して、それが自然的誤謬を犯すものだと批判されているのであり、他方、∀x（Px→ Gx）のような、あるものが善いことの主張（何が善いかの主張）が批判されているわけではない。したがって、客観主義者のムーアの立場でも、単なる述定をしているタイプの（定義をしているわけではない）「快は善である」のような発話は（偽であるかもしれないが、不可能なありえないことを言っているわけではなく）有意味であることになる。

「大きい」、「小さい」が修飾的な形容詞と見なされるのは、これらが修飾する語・概念に対して相対的な概念であるからである。それゆえ、「長い」、「短い」や、「高い」、「低い」（ビルとしては高いとか、山としては低い）とか「高価だ」、「安価だ」（鉛筆としては高価だとか、ダイヤモンドとしては安価だ）などもそうであろう。それに対して、「赤い」や「丸い」などは相対的な度合いが低い概念であるので、そのものの性質として述定的に使用可能となる。「よい」、「悪い」は、確かに相対的な度合いが高い概念であろうが、完全に述定的な使用が不可能だとは言い切れないと考える。というのも、「よい／悪い」が道具的価値／内在的価値という区別と連動していると考えられるからである。道具的価値とは、何らかの目的を達成するための手段・道具としての価値で

あり、他方、内在的価値とは、(他の何か価値のあるものを獲得したり達成したりするための価値ではなく）それ自体がもっている価値のことである。道具として使用されることが多い「靴」とか「スプーン」のよし悪しとは、その発話者が靴やスプーンによって達成しようとしている目的に応じて決まる。食物である「イチゴ」とか「オレンジ」のよし悪しも、発話者がイチゴやオレンジに対して求めている事柄・目的に応じて決まる。それゆえ、そういったものについては、無条件に「よい」とは述定できないため、その場合の「よい」は修飾的なものとなる。しかしながら、行為についてはどうであろうか。行為には、道徳的な行為以外にも、商行為、医療行為、感情的行為、犯罪行為など様々な行為がある。「よい感情的行為」とか「よい犯罪行為」という使用には違和感があるが、「よい商行為」とか「よい医療行為」という使用には奇妙さを感じない。しかし、道徳・倫理学の議論においては、「よい」行為とは道徳的・倫理的に「善い」行為のことである。また、行為ではなく、人について考えた場合、「よい」人とは、有徳な virtuous 人のことであろう。多義的な‘good’の、こうした倫理的な意味での用法は、*Oxford English Dictionary* では、５番目の用法として挙げられており、倫理学の議論で「善い」が用いられている場合には、(それが帰属される対象が) 行為であろうが人であろうが、「善い」はそれが修飾する名詞と切り離して述語化可能となる。すなわち、倫理学の議論では (OED の‘good’の５番目の用法では)、「Ｇa∧Ma」〔Ｇx : x は（倫理的に）善い、Mx : x は人である、a : Ａさん〕というように、述語を二つに分割可能なのである。このことも、先述した倫理的客観主義の立場からの批判とともに、ギーチの見解に対する批判となる。

さて、「修飾的形容詞」と「述定的形容詞」についての考察に続いて、ギーチは、「よい」には推奨的 commendatory な意味があることを主張するオックスフォードモラリストたちの見解を検討している。ギーチは、彼らの見解を、「よい」の第一義的な機能 function ないしは力 force が、「記述 description」ではなく、「推奨 commendation」だとするものと理解している。ギーチは、この論文で、この見解を否定し、「よい」の第一義的な力は記述だとする自説を展開している。ギーチは、「ハットン[10]がよいウィケットでバッティングした」という新聞記事や、「ある人がよい目をもっている」とか「ある人がよい胃をもっている」という陳述を例に出し、これらの陳述では「よい」は第一義的に記述的な力をもつ（決してそのウィケット、その人の目、胃を勧めているのではない）としている（Cf. pp. 36-37)。あるいは、「テニスのよいストローク」とか「チェスのよい指し手」というフレーズに現れた「よい」も記述的だとする（p. 40)。ギーチの見解はさておき、ここでは、ギーチが、「記述」や「推奨」が「よい」の意味 meaning ではなく、力 force だとしている点に注目したい。ギーチは、「～はよい～である」という文が発話されたときに、当該の発話が聞き手に及ぼす影響力として「記述」や「推奨」を考えているのである。このような「聞き手への影響力」という観点は、オースティンが『言語と行為』において展開した言語行為で取り扱われたものである。

続いて、ギーチの次のような陳述に注目したい。

ある人が「あるものがよいＡだ」と主張したとしても、それを聞いた別の人がＡを欲していない場合には、その主張がその人の選択に影響を及ぼすことはない。そして、行為に対するこうした影響は、「よい」という語の第一義的な力ではない。「君のズボンに蟻がついている」という発話の方が―この発話は明らかに第一義的には記述的な力をもつのであるが―「よい」という語が使用された多くの発話よりもはるかに行為に影響を及ぼすと思われる。(p. 37)

ここでギーチは、発話された文の「力 force」が影響を及ぼす聞き手のことを考えている。これは、オースティンが「発語媒介行為 perlocutionary act」によって考えていたことに相当する。(発語媒介行為とは、ある人の発話によって、聞き手の側に影響・効果を及ぼすような行為のことである。）たとえば、話者が「推奨」を**意図して**発話したとしても、聞き手の側でその意図が実現されないこともありうることになる。この引用は、まさにこのことを指摘するものである。

5.マッキー(Mackie, J.L.)の見解

マッキーは、「客観的な価値は存在しない」（Mackie,1990, p.15, 邦訳 p.7）という立場に立つ。しかし、そうかといって主観主義的立場をとるわけではなく、単に「客観的な価値」に対して批判的な態度をとっているだけである。マッキーは、自身の立場を「道徳的懐疑主義 moral scepticism」とよんでいる。彼によれば、道徳判断には、「第一階 first order」を構成する通常の倫理的判断のレベルと、「第二階 second order」を構成する第一階の言明について思考するレベルとがある。道徳的懐疑主義は、この第二階で展開されることになる。

ヘアは、「何のためにあるのか」、「何をすることが期待されているのか」ということを説明する語を、機能語 functional words と呼んだが、機能語の意味を十分に説明するためには、それが何をするためのものなのかを説明できなければならない。例えば、「よい錐」と言われたとき、「錐」が何か、そして何をするためにあるものなのかを知らなければ、「よい錐」という語を十分に理解することはできない。ある人が辞書を見て、錐が「穴をあけるためのもの」だと知ったとき、ある錐が「穴をあけない錐」であったなら、少なくともその人はそれを「よい錐」だとは思わないだろう（むしろ、「悪い錐」だと思うかもしれない）。反対に、「悪い錐」について考えてみたとき、悪い錐には、全く穴をあけない錐だけでなく、大きな力を加えても少ししか穴をあけることができないような錐も含まれるであろう。そこで、我々は、「よい錐」が、「穴をあけるという目的に役立つ錐」ではなく、もう少し正確に、「穴をあけるという目的をよく well 達成することに役立つ錐」を意味するのだと考える。しかしながら、マッキーは、この説明が、「よい good」を「よく well」という意味に転換させただけなので、循環的になってしまうことを指摘している。ヘアは、「よい」が、機能語としても、非機能語としても、推奨という性質をもっていると考えている。しかし、「よい」とは何かを説明するときに、それを「推奨すること」だと定義し、続いて、「推奨」とは何かを説明するときに、「よいもの」と定義すれば、それもまた循環的になってしまっている。また、「推奨」という行為はしばしば記述を伴う。例えばコーヒーを推奨するときに、その理由は「深みがある」とか、「酸味と苦みのバランスがよい」、あるいは「滅多に収穫できないコーヒー豆を使っている」という記述となるかもしれない。マッキーは、このような記述は、各人の好み preference に左右されるその人の要件 requirements[11)]を満たすものであり、「自己中心的推奨 egocentric commendation」であると言う。マッキーは、こうした自己中心的な「よさ」と、よい錐のもつ機能的な「よさ」は異なるものとして区別されなければならないと考えている。

ギーチは、形容詞を修飾的形容詞と述定的形容詞に二分し、機能的な「よい」は修飾的形容詞であると主張したが、マッキーもとりあえずそれを認めている。しかし、上述の自己中心的推奨としての「よさ」に着目したとき、「よい」は「必ずしも常に修飾的であるわけではない」と、マッキーは反論する（Mackie, 1990, p. 57, 翻訳 p. 75）。つまり、機能的に「よい」ナイフは、切る者にとってよく切れるナイフのことであるが、自己中心的推奨としての「よさ」について考えてみたとき、例えば骨董収集を趣味としている人にとっては切れ味に関係なく、骨董的価値があるナイフが「よい」ナイフになるのである。

マッキーは、一般的な「よさ」が、「当該の種類に属する要件・関心・欲求を満たすようなもの」（Mackie,1990, p.59, 邦訳 p.79）と定義されるとしたら、この「よさ」が果たして道徳的文脈にも適用されるのか、と問う。そして、彼は、それを否定する。というのは、「よい」が道徳的文脈で、（錐のもつ「よさ」のような）記述的な意味をもつ場合も、また、自己中心的な推奨に使われる可能性もいずれも否定できないからである。記述的な意味をもつ場合に、そうだからといって客観的価値が存在するという帰結は導かれない。高度に確定した記述的意味を持ちながらも、自己中心的な推奨のための慣習的な発語内的力 force を持つ言葉もあるからである。「勇敢な brave」という語がその典型事例である。マッキーによれば、「人がある人物や行動についてそれを勇敢であると言う際、それによって、そのような人や行動の好意的評価を承認することなしに、そ

う言うことはほとんどありえない」(Mackie, 1990, p.63, 邦訳 p. 85)。しかし、だからといって勇気が客観的な価値をもつわけではないとマッキーは主張する。「よい」の一般的な意味を道徳問題に適用し、尤もらしい説明を与えることは可能であるが、それによって道徳的な「よさ」の実質的な答えを与えたことにはなりえないのである。

6.まとめと考察

以上見てきたことから、「よい」には（第一義的な primary 意味として）「指令」と「推奨」という意味があるというヘアの考えに賛同することはできないことになる。４で考察したように、ギーチが「よい」の意味 meaning とは言わず、力 force と言っていることや、５で考察したように、マッキーが言葉のもつ「発語内的力 force」に言及していることから、ヘアによる「指令」もしくは「推奨」としての「よい」の分析は、実は、その発語によってもたらされる聞き手への影響を射程に捉えた分析だったことがわかる。

考察の前にまず、本稿での考察に関連する著作を時系列としてまとめておく。ヘアの *The Language of Morals* は、1952 年に出版されたが、その後 1963 年に出版された *Freedom and Reason* でも、やはり「よい」が推奨と指令を意味し、道徳判断が普遍化可能であることが主張されている。このようなヘアの見解が変わったのは、１で述べたとおり、*Moral Thinking: Its Levels, Method and Point*（1981）においてであり、この著作では「よい」には指令的ではない意味もあることが認められている。とはいえ、最晩年の *Sorting Out Ethics*（1997）の中で、少しだけ（情緒主義を批判する文脈で）「発語内行為」に言及されてはいるが、ヘア自身は、最後まで自身の分析・考察を発語内行為としてのものとは考えていなかった。しかし、１でも述べたように、指令主義から道徳判断の普遍化可能性を導くためには、「よい」という語を用いた発話に指令という行為を遂行させるような意味論的ないしは語用論的な取り決め convention がなければならない。結婚式や遺言書におけるおきまりの文言、あるいは約束や警告といったような発語内行為として認定可能な発話と異なり、「～はよい」という発話には、発語内行為として認定可能な意味論的規約はないと考えられる。「～はよい」という発話を推奨や指令と考える際に考慮されるべきことは、発話者の意図であろう。２の最後で示したように、ヘア自身も「～はよい」という発話の意図について考察しているように思われる箇所もある。そこで、以下では、「よい」という語が、ヘアが指摘している推奨、指令、皮肉以外の「意図」をもって用いられることがあることを例証したい。

（１）世間体・他人の評価を気にする「よい」

Ａ：この絵はとてもよいです。美術的な評価も高いし、有名な評論家も「よい絵だ」と言っています。

Ｂ：本当にこの絵はよいですね。

Ａは実際には「よい」と思っていない（意図していない）が、「美術的な評価が高い」という事実と、有名な評論家が「よい」と評価していることから、この「よい」が客観的な価値判断であると信じ、自分もそれに乗り損ねてはいけないという思い(意図)から、「よい」と言っている。他方、Ｂは、これを聞いて客観的な評価と信じ、この話に合わせなければ、美術を理解しない人だとＡに思われるので、よく分からず同意している。この場合は、美術を理解しない人だと思われたくないという意図をもって発話していることになる。

このような会話は、美術だけではなく、小説などの文芸についての会話にも多く見られる。「この小説はよい」と言われると、実際には読んでいないが、読んでいないと思われたくないので、「よいですね」と同意することがある。本当は「よい」とは思っていないが、同意しなければ、芸術を理解していないと思われるので、それが嫌で同意する場合があるのである。

（２）聞き流す「よい」

Ａ：モーツァルトの交響曲はとてもよいです。

Ｂ：私もよいと思います。

Ａは、本当に「よい」と思って語っているが、Ｂはモーツァルトの音楽のよさがわからない。Ｂは、モーツァルトの音楽に興味がないが、反論すると面倒なので同意して聞き流している。この場合は、聞

き流すという意図をもって発話していることになる。

（3）羨望が隠された「よい」
A：明日から一週間、家族旅行に行きます。
B：それはよいですね。
　Bは、Aが家族旅行に行くことを「よい」と言ってはいるが、実際には羨ましいと思っている。この場合は、Aに同調することで、人間関係を良好にしようという意図をもって発話していることになる。

（4）高価で選択できない場合
A：このイチゴは甘くてよいイチゴよ。
B：本当ね。
　ヘアは、イチゴの「よい」について、イチゴを「よい」と評価しておきながら、別のイチゴを選択したら奇妙だと断定し、それがありえないことのように考えていたが、別のイチゴを選択することも日常生活で起こり得る。それは、このイチゴが本当に「よい」と思ってはいるが、高価すぎて予算超過のため、別の安いイチゴを選択する場合である。この場合は、別のイチゴを選択する意図をもって発話していることになる。

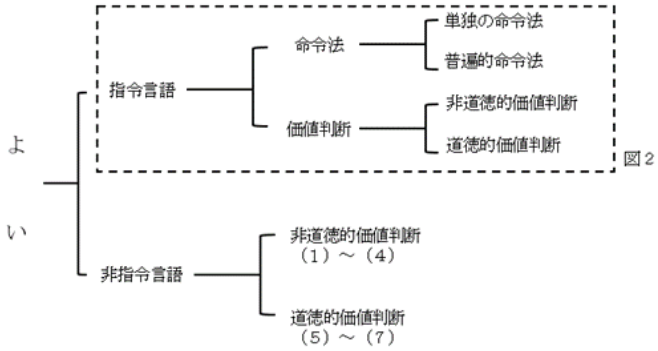
（5）小馬鹿にした「よい」
A：D君は、真面目すぎて顔に表情がないし、話をしてもロボットと話しているみたいだね。
B：でも、D君は人に意地悪しないし、よい人だよ。
　この場合は、AもBも、D君が道徳的に「よい人」であるとは思っていない。機械のようで褒めるところも特にないが、D君を悪く言うのも気がひけることから、意地悪をしないという点だけを評価して、「よい人」と少し小馬鹿にした表現をしているのである。この場合は、小馬鹿にするという意図をもって発話していることになる。

（6）不本意ないしは虚偽の場合の「よい」
A：先日、Eさんが難しい仕事を快く引き受けてくれました。
B：Eさんは、本当によい人ですね。
　Aさんは、Eさんのことを本当に「よい人」だと思っていて、BはEさんを嫌な人だと思っている。Eは、世間ではとても道徳的で評判がよいが、Bは、Eの本性が道徳的に悪いことを知っている。Bは、Eのことを悪く言ったとしても、Eの評判を考えれば到底信じてはもらえず、しかも悪口を言ってしまうと自分自身が悪者にされかねないので、不本意ながら「よい人」という評価を下している。この場合は、自分自身の評判を落とさないようにするという意図をもって発話していることになる。

（7）褒める「よい」
子：今日はちゃんと一人で留守番できたよ。
母：いい子ね。
　親が子を褒める際にも、しばしばこのような「いい子」という表現が使われる。しかし、親の気持ちとしては、単に褒めているわけではなく、子どもにどのような行為が「よい」ことであるのかを、「いい子」という表現によって教え込んでいるとも考えられる。子どもがある行為をしたときに、「いい子」と褒めることで、その行為が「よい」のか「悪い」のかを教えていると解釈することも可能である。この場合は、子どもの躾・教育を意図して発話していることになる。

　「よい」という語が用いられる発話の意図としては、これ以外にも様々なものがあると思われるが、これだけでも「よい」が指令を**意図**し、聞き手の「選択」を導くものとは限らないことが分かる。
　ヘアは、「よい」という発話が、心の底からのものであり、そのものを評価して勧めていると考えているが、（1）～（7）の例に示したように、「よい」によって常に評価・推奨・指令が意図されるとは限らない。我々が、「よい」と発話するとき、非道徳的文脈においても、また、道徳的文脈においても、その対象に対して本当に称賛して「よい」と評価している場合もあれば、様々な思惑が隠されている場合もある。確かに、ヘアが述べるとおり、今この瞬間に「よいイチゴだ」と言っておいて、別のイチゴを手に取れば、その光景は奇妙であろう。しかし、「よい」と言っているにもかかわらず、「推奨」ではなく、別のことが意図される場合があることを考慮しなければならない。以下に、（1）～（7）の「よい」の

機能について図で示す。



【図３】

ヘアは、道徳語「よい」が指令言語であると断定して論を進めているが（図２参照）、図３で示したとおり、「よい」は、指令言語と非指令言語という二つの側面をもつと考えられる。指令言語としての「よい」から導かれる価値判断は、ヘアが分析したとおりであるが、非指令言語に関しては、更に非道徳的価値判断と道徳的価値判断とに分けることができ、非指令言語にはヘアがいう意味での「指令」や「推奨」が含まれないことは明白である。

最後に、本稿での結論をまとめておこう。本稿では、ヘアによる「よい」の分析が、オースティンの言語行為論における発語内行為のように、社会的慣習・意味論的規約を背景としない限り普遍化可能性につながることはないことが指摘された。そして、ヘアが言うところの「よい」の意味としての「指令」や「推奨」は、社会的慣習を背景とした発語内行為ではなく、むしろ発話者の意図の問題と見なすべきことが示された。したがって、「よい」を用いた発話の意図の多様性のゆえに、（ヘアの目論見に反して）「よい」の分析から道徳判断の普遍化可能性が導かれることはないということになる。

注

[1] ヘアの著作からの引用については、以下の略記を用いる。
LM: *The Language of Morals* (1952)
FR: *Freedom and Reason* (1965)
MT: *Moral Thinking* (1981)

[2] ヘアの用語‘prescriptive’は、「指図」と訳されることもしばしばであるが、本稿では「指令」とした。

[3] もっとも、すでに『道徳の言語』においても、「よい」の意味が「勧める」だけに限定されないことが示唆されている（ML:11.2）。加えて、『道徳的に考えること』では、道徳判断は、指令性と普遍化可能性の二つの特徴に基づいて定義できないことをヘア自らも認め、「優越性」という特性にも言及する必要があるとしている（MT:3.5）。ただし、本稿の考察で明らかにされる、〈ヘアによる「よい」の分析が、実は（言語行為論における）発語内行為としての分析でない限り、それが道徳判断の普遍化可能性につながることはない〉という見方については、ヘア自身によってもまた、他の多数の先行研究においても（少なくとも、日本語で書かれたすべての文献と、筆者が確認しえた英語の文献においては）指摘されていない。それゆえ、まさにこの点に本稿のオリジナリティがあると言えよう。

[4] というのも、「正しい」か「正しくない」かのどちらかしかなく、「正しさ」に程度があるわけではないからである。正しいか正しくないかは、（道徳）原理に従っているか否かによって判断されることになる。

[5] ヘアによれば、「正しい」という道徳語には、「勧める」という指令的意味が含まれている。

[6] ヘアによれば、「きちんとした tidy」と「勤勉な industrious」という語については、記述的意味と評価的意味の付加性が、「よい」という語と逆になる。つまり、これらの語は、評価的意味が二次的で、記述的意味が一次的になる（LM:7.5）。記述的意味と評価的意味のいずれが「一次的」でいずれが「二次的」かということは、記述と評価がそれぞれ一様になるか多様になるかというに拠る。「よい」は評価が一様で記述が多様であるが、他方「勤勉な」は記述が一様であるため、記述的意味と評価的意味の付加性が逆になるのである。このような語は、冷やかしの意味や厭味という意味で使用されやすい。さらにヘアは、後の著作『自由と理性』において、価値判断は、行為を導く指令であるが、「このイチゴはよい」と言いながら別のイチゴを買うこともありうるし、「～をすべきである」と判断しておきながらその行為をしないことも考えられるとしている。そのことを、ヘアは「道徳的弱さ moral weakness」と表現している（FR:5.1）。道徳的弱さをもつ人は、道徳的判断を受け入れてはいるが、反抗心のために自分自身に命令することをやめているか、あるいは、「～をすべきである」と考えてはいるが、道徳的確信に欠けているために、そのような弱さが生じると説明されている。

[7] 「よい」と判断しておきながら、それを選択しない可能性もある。ヘアは、そのものについて関心がない場合や、「よい」を皮肉の意味で使用している場合には、そのものを選択せずに「よい」という語を用いることがあると述べている（LM:7.5）。

[8] 図 2 は、ヘアが示した図に加筆したものである。

[9] 「快」のなかには悪い快もあるという批判があるが、本稿では、それでもある種の快が善いのであれば、「善い」が述定的に用いられる場合があることを指摘しているので、そのような批判は無害なものとなる。

[10] おそらく、クリケット選手の Sir Leonard Hutton (1916.6.23-1990.9.6)のことであろう。

[11] この「要件」は、「評価規準 standards of evaluation」とは異なる。

文献

Austin, J. L., 1962, *How to Do Things with Words*, Oxford University Press.（邦訳）坂本百大訳『言語と行為』大修館書店, 2014 年.
Geach, P.T., 1956, “Good and Evil,” *Analysis*, 17, 32-42.
Hare, R. M., 1952, *The Language of Morals*, Oxford University Press.（邦訳）小泉仰・大久保正健訳『道徳の言語』勁草書房, 1982 年.
Hare, R. M., 1956, “Geach: Good and Evil,” *Analysis*, 17, 103-111.
Hare, R. M., 1965, *Freedom and Reason*, Oxford University Press.（邦訳）山内友三郎訳『自由と理性』理想社, 1982 年.
Hare, R. M., 1981, *Moral Thinking: Its Levels, Method and Point*, Oxford University Press.（邦訳）内井惣七・山内友三郎訳『道徳的に考えること:レベル・方法・要点』勁草書房, 1994 年.

Hare, R. M., 1997, *Sorting out Ethics*, Oxford University Press.
Mackie, J. L., 1977, *Ethics: Inventing Right and Wrong*, Penguin Books, (1990).（邦訳）加藤尚武監訳『倫理学：道徳を創造する』哲書房, 1990 年.

新人看護職員の早期離職理由
―心理的プロセスの検討―

柏田　三千代
日本国際情報学会

Reasons for early retirement of new nursing staff
- An examination of their psychological processes―

KASHIWADA Michiyo
Japanese Society for Global Social and Cultural Studies

Why do a definite number of starting young nurses retire soon after finding new posts?　This paper tries to find out the reasons by focusing on　psychological processes by which they leave in less than a year after they are employed. Analysis of documents concerned reveals: they find their working environments different from what they have expected them to be; skills they have acquired at nursing schools/colleges prove insufficient for their expected jobs; they find it difficult to get along well with senior members; their mind and body do not fit in well; they lose interest in work of nursing itself.　These reasons account for the difficulty of securing sufficient numbers of nurses, while they are common to other young people of the same generation working in other fields.

1.はじめに

看護職員の就業者数は年間平均 3 万人程度増加しているが､2025 年には 3 万人～13 万人が不足することが予測されるため、厚生労働省は「復職支援」「離職防止・定着促進」に取り組み、看護職員の確保に努めている 。その取り組みの中で厚生労働省は、看護師等養成所を卒業した就労 1 年未満の新人看護職員に対して、新人看護職員が基本的な臨床実践能力を獲得する研修を実施する体制を 2011 年 2 月「新人看護職員研修ガイドライン」として作成した。そして医療現場等の状況や看護基礎教育の見直し等の諸事情や研修成果等を踏まえ、2014 年 2 月にガイドライン改訂版を作成している[1)]。しかし、公益社団法人日本看護協会の「2016 年病院看護実態調査」では、新人看護職員離職率 2010 年 8.1%から 2011 年 7.5%に減少したが、2015 年 7.8%と 7%台後半で推移し、看護職員確保の困難さが表れていた[2)]。

新人看護職員の離職についての先行研究として文献検索データベースの医学中央雑誌Ｗｅｂ版（Ver.5）で、キーワードを＜新人看護＞and＜離職＞2001 年から 2017 年までの原著と総説を検索すると､新人看護職員の離職に関する研究 87 件と多く行われ、その内文献研究も 3 件行われていた。下田の「看護師の離職に関する文献検討」[3)]では、新人看護師だけではなく中堅看護師なども含まれ、新人に限らず看護師の離職に関する研究がどのような方法、対象、内容で行われているかを概観していた。内野の「本邦における新人看護師の離職についての文献研究」[4)]では、研究対象者は新人看護師（1 年間就業継続できた看護師・離職した看護師)、就職後 3 年未満の看護師、先輩看護師、管理者、看護基礎教育機関の教員で、結論として新人看護師の離職要因と離職防止対策、看護基礎教育機関の離職予防策を明らかにしていた。片桐の「新卒看護師の離職理由と就業継続に必要とされる支援内容に関する文献検索」[5)]では、新卒看護師入職後 3 か月・6 か月・12 か月の困難さと離職願望、継続理由、支援内容を分析していた。これらの文献研究から下田と内野の研究対象は、看護師等養成所を卒業した就労 1 年未満の新人看護職員だけではなく、片桐の研究対象は新人看

護職員ではあるが、就業継続している新人看護師の困難さと離職願望、継続理由、支援内容の研究である。

そこで、本研究は看護師等養成所を卒業した就労 1 年未満の早期離職した新人看護職員を研究対象に文献検討を行い、早期離職に至るまでの心理過程と復職について考察していく。また、その新人看護職員の離職理由は、他の若年者の離職状況と比較して、早期離職理由は新人看護職員の特徴とされるのかを明らかにしていく。

2. 新人看護職員の離職心理過程

新人看護職員の離職理由の先行研究として、文献検索データベースの医学中央雑誌Ｗｅｂ版（Ver.5）を用いて、キーワード＜新人看護＞and＜離職＞2001 年～2017 年までの 17 年間の原著と総説を検索すると 87 件が該当した。該当した論文 87 件の殆どが就労している新人看護職員の離職願望を研究対象としていたためそれらを排除し、看護師等養成所を卒業し就労 1 年未満の早期離職をした新人看護職員の離職理由の心理過程が書かれている論文 3 件を研究対象とした。

2.1 「就職後 1 年以内に退職を決断した看護師の退職に至るまでの心理変化の一考察」

橋本[6]の研究対象者は 22 歳～23 歳の 3 名の女性で、学歴は私立大学、県立看護短期大学、国立看護専門学校を 1999 年度～2000 年度に卒業していた。新人看護職員として就労していた期間は 11 か月～12 か月である。調査期間は 2002 年 8 月初旬～9 月下旬で、調査方法は橋本が作成した半構成的インタビューガイドを用いた面接調査である。離職までの経過として①自分の思っていた看護と実際との違いを知る②自分で必死に努力する③すべてがうまくいかないと感じる④仕事に興味がなくなると 4 つの段階に分類されていた。

① 自分の思っていた看護と実際との違いを知る

「思った以上に仕事が多くて終わらない」「テレビで見ていた世界とは違い、イメージよりも肉体労働」と多忙な看護業務への驚きや、「自分ばかりがミスをしているような感じがした」「自分の不器用さがわかった」と不十分な自分の看護技術を悟り、「夜勤があるのは知っていたが、その日働いてその夜にすぐ出て来るのは知らなかった」「肉体的に辛かった」とこれまでと違う生活に戸惑っていた。

② 自分で必死に努力する

「とにかくしんどかったけど、仕事は休まなかった」「休みの日もずっと勉強した」「少しでも技術を覚えたいと朝はみんなより早く出勤して、帰りも一人で練習した」とひたすら看護の勉強をし、「他の病院で働いている友人たちにメールをして励ましあった」と心の安定を図っていた。

③ すべてがうまくいかないと感じる

「とにかく時間がなくて、患者さんを軽くあしらう毎日」「自分に余裕がないから、仕事が楽しいとまで思えない」と煩雑な看護業務、「不器用さは相変わらずで、ちっとも技術が上達しない」「人工呼吸器が何回教わっても怖くて使えない」と仕事が上達しないと感じていた。また、「学生の時のような友達ができない」「新人という立場もあり、何だか怯えている」「病棟の雰囲気が悪い」「怒る人、怖い人がいる」と複雑な人間関係、「連休が月に 1 回ぐらいで遊びに行けない」「休日にも病棟会とか勉強会があったら出席しなければいけないので、自分の時間がない」と慣れない生活を語っていた。

④ 仕事に興味がなくなる

「何も楽しいことがない。学校の先生はもう少し続けたら楽しくなるよって言ってたけど無理」「看護の仕事は嫌いじゃなかったけど、疲れた」「病院も人間も科も違うところで、もう一度働きたいと思った」と退職の決断をし、「他にもっとやりたいことがあるんじゃないかと思った」「まだ若いから、色々試したい」と新たな仕事や職場への希望を抱いていた。

2.2 「看護大学を卒業した看護師の入職早期離職体験」

菊岡[7]の研究対象者は 20 歳代の女性 2 名で、看護大学を卒業している。新人看護職員として就労して

いた期間は 1 年未満、早期離職後約 1 年～4 年経過している。調査期間は 2006 年 3 月 28 日～8 月 11 日で、調査方法は半構成的面接である。①病棟の雰囲気を敏感に感じながら仕事をする②一人の先輩にいじめられる③習ったことを 1 度でできない④患者の前で先輩看護師に怒鳴られる⑤「やる気がない」と言われ、「ちゃんとしなきゃいけない」と気負う⑥極度の不眠などの身体症状⑦不眠・集中力の低下、間違えが増える、先輩たちに怒られるという悪循環⑧先輩に相談を持ちかけても話を切られ、答えが得られない⑨辞めないで頑張り続ければという意識しか全くなく、ひたすら頑張る⑩ミスをし、自分が患者に危害を加えてしまう看護師になっていると気付く⑪カウンセリングを受けるという 11 段階に分類されていた。

① 病棟の雰囲気を敏感に感じながら仕事をする

「仕事とか殺伐とした忙しさとかで、結構みんなピリピリしている」「先輩の機嫌を見て動いたり、仕事よりも疲れる」という職場の雰囲気を感じ取っていた。

② 一人の先輩にいじめられる

「一人のボスみたいな人に、よくいじめられた」「無視される」「先輩にちょっと頭にくるよね、あの子って言われてしまったので、もうみんな先輩たちが次々とそうだよね、そうだよねっていう感じになってしまって」と先輩たちの言動を語っていた。

③ 習ったことを 1 度でできない

先輩看護師から「昨日教わったでしょう。何でできないわけ」と患者の前で怒鳴られた。「1 回教えられてもできなくって、ま、それは学生の時からずっとそうだったんですけど、もう何回も何回もやって、やっとできるようなタイプだったので、でも学生の時にはそれでいいよって、先生たちに容認して貰ってたので、自分でもゆっくりだけど、ちゃんとやっていければ、最終的にきちんとできるようになればいいやって思ってやってたら、やっぱりそれは職場では通用しなくって」という一度で実施できない体験や学校と職場の乖離を語っていた。

④ 患者の前で先輩看護師に怒鳴られる

「患者さんもびっくりしますよね。患者さんの前で怒鳴られてたので。うーん、で、それがショックで」「新人なんだから気にすることないよとかって、患者さんの方に逆に慰められてて」「情けなかったですね」と患者の前で叱られる心境を語っていた。

⑤ 「やる気がない」と言われ、「ちゃんとしなきゃいけない」と気負う

ある看護師が後ろの方で「何をやっても 1 回じゃ覚えられないし、結局やる気がない、覚える気がないんだよあの人」という言葉を聞き、「プレッシャーじゃないですけど、自分の中でそういう風にちゃんとしなきゃいけないっていう思いだけが、すごく強くなってしまった」と他の看護師からの言葉で、追い詰められた心境を語っている。

⑥ 極度の不眠などの身体症状

「私はできないんだから、ちゃんとやらなきゃっていう思いだけが強くなっちゃって、だんだん眠れなくなっていって」「まるっきり眠れないんです。あの、入眠できない。まず、で薬を飲んで入眠しても、30 分くらいで起きちゃうんですよ。で、もう毎晩殆ど起きてる感じで」と精神症状が出現し、肩より上に腕が上がらなくなる肩こりや心悸亢進、4 か月間で 10ｋｇの体重減少を起こす身体症状も出現していた。

⑦ 不眠・集中力の低下・間違えが増える・先輩たちに怒られるという悪循環

不眠によって「集中力が落ちてくるし、ぼんやりしてしまって間違いが増えて、また先輩たちに怒られるっていう悪循環になってしまった」「私ってだめなんだって、すぐにこう追い詰められていっちゃって」「私、生きててもしょうがないかもって、ずーっと思ってましたね」と精神状態を語っている。

⑧ 先輩に相談を持ちかけても話を切られ、答えが得られない

先輩看護師へ相談すると「自分で考えなさいとか、

リアリティショックだから、しばらくすれば治るよという形で、その話を途中で区切られてしまったので、せめて、話をちゃんと聞いて欲しかった」と、相談する相手がいない孤独を語っていた。

⑨ 辞めないで頑張り続ければという意識しか全くなく、ひたすら頑張る

「世の中は甘いもんじゃないし、私なんて看護しかずっとやってこなかったし､他に資格もないから、たとえここを辞めたとして、じゃどこに行くの、どうやって生きていくの」と冷静に物事を考える精神状態にはなかったと語っている。

⑩ ミスをし、自分が患者に危害を加えてしまう看護師になっていると気付く

ミスの反省文を書いている時に、学生時代のＣ先生に聞いた臨床時代のエピソードを思い出す｡「自分が看護師に向いているか向いていないか、自分がいることで患者さんに危害を加えてしまうっていうことがわからないなんて、人間としてどうなのかしらね」という先生の話から､「そういうこと（ミス）も重なったし、Ｃ先生のお話も思い出したし、友達からも、ちょっと 1 回辞めた方がいいんじゃないっていうのもあったので、ちょっと、辞めようかなと思って、辞めることを決意した」と学生時代のＣ先生や友人の言葉を思い出し、離職を決意している。

⑪ カウンセリングを受ける

離職の意向を看護師長へ相談するとカウンセリングを勧められる｡「なんか､話したら余計決意が固まって、気持ちの整理がつき、自分はやっぱりこうしたいんだってことがわかったんですよ｡自分の中で」とカウンセリングを受けることによって、思考が整理され、離職の決意を語っている。

2.3 「早期退職した病院勤務の新卒看護師の入職から退職後までの心理的プロセス」

山田[8)]の研究対象者は男性 2 名、女性 8 名の 10 名で、新人看護職員として就労していた期間は 1 か月～10 か月である｡調査期間は 2011 年 4 月～10 月で、調査方法は半構成的面接、退職してから面接実施までの期間は 5 か月～5 年である。また、面接時の現職は看護師 6 名、保健師 1 名、看護教員 1 名、未就職 2 名である。離職までの心理的プロセスとして①現実の世界への戸惑い②どうしたらよいのかわからない③看護師としての模索④自己への失望⑤心の調整⑥仕事のミスをした自己価値のゆらぎ⑦看護師としての自己のあり方を自問⑧心身のバランスの崩壊⑨退職決断の引き金⑩退職の決断の 10 段階に分類されていた。

① 現実の世界への戸惑い

「すべてにおいて、その日に指導してくれる先輩にお願いします。お願いしますって言ってて。先輩は忙しいんですけど、点滴などは全部先輩に頼まないといけなくて」「ケアが多くて、ずーとバタバタという感じでしたね。患者さんとゆっくり話したりとかっていう時間はあんまりなくて」と入職当時の心境を語っていた。

② どうしたらよいのかわからない

「1 日の勤務が終わった後に、何か質問あるって言われても､わかってない､まだ初めてわからない。……今は大丈夫です。みたいな感じで答えていました」「何か聞けなくて、何を勉強したらいいですかって｡そんなことを聞いたらいけないよなぁと思って」と何がわからないのかがわからない、聞くことができない状態を語っていた。

③ 看護師としての模索

「先輩との付き添い期間が終わったら、もう、すぐ部屋持ちだったんですよね。段々、1 人でやらないといけないことが多くなってくると、段々こうプレッシャーがかかって」「ケアも全部自分なんですよ。……負担がすごく大きかったんですよね。だから追われるんですよ､時間に｡」先輩の付き添いから離れ、1 人立ちへの負担を語っていた。

④ 自己への失望

「技術を習得するのも遅くって。友達にはどんどん先を越されて行ってしまうし」「仕事が終わって、プリセプターと他のプリセプターに 2 対 1 くらいで、

今日何がダメだったか言いなさいって言われて箇条書きにされて、今日これだけダメだった。これがダメ、これがダメ、これがダメみたいな感じで言われて。……これこれがダメって言われたら、ダメなんだダメなんだってなってた」と自身を否定され、自信喪失になっていったと語っていた。

⑤ 心の調整

「同じ病棟の同期も辞めたいと言いながら頑張っていたので、ここで我慢して踏ん張らないとなって思ってました」「1 年で再就職絶対難しいじゃないですか」と辞めたい思いを止めていたと語っている。

⑥ 仕事のミスをした自己価値のゆらぎ

「10 月に入ってから、インシデントを立て続けに起こしてしまって、1 週間のうちに 3 回くらいインシデントを書いてしまって、それで、なんか自分に自信がなくなって、先輩からもあなたには任せられないって言われて」「看護師に向いてないなぁ。怖いなぁって思って。私がしなかったらこんなことにはならなかったのにって思いました」と患者の生命にかかわることへの恐怖感を語っていた。

⑦ 看護師としての自己のあり方を自問

「私、こんなバリバリ働く看護師さんになる勇気ないなぁって思い始めて」「この患者さんに自分はうまく援助ができているのかとか」「私がやりたかったことは何」と自己への葛藤を語っていた。

⑧ 心身のバランスの崩壊

「食事が摂れなくなって、眠れなくなって」「嘔吐と下痢のような感じになったんですけど。その前から行きたくないって感じになって」「病院に行ったけど、病棟に行けなかったんですよ。なんか、気分が悪くて」と身体的不調や精神症状が出現していたと語っている。

⑨ 退職決断の引き金

「主任との面接のときに、何か勉強してるのみたいに言われて、その時に看護師向いてないわよって言われて」「あなたこのままどうするの師長さんに言われて、……先輩に迷惑をかけてるってそういう風に責められて」と上司に責められる発言あったと語っている。

⑩ 退職の決断

「体調とかも崩して、やっぱり自分の中で限界がきて、ちょっと 1 回辞めようと思って」「自分の将来のことも考えないといけないなぁって思い始めて」「自分の中で、もういいかなぁって思い始めて、自信も持てなかったし」と仕事を続けていくことへの諦めを語っていた。

2.4 早期離職した新人看護職員の心理過程の共通

これまでに概観してきた 3 論文「就職後 1 年以内に退職を決断した看護師の退職に至るまでの心理変化の一考察」「看護大学を卒業した看護師の入職早期離職体験」「早期退職した病院勤務の新卒看護師の入職から退職後までの心理的プロセス」の心理過程の分類の共通性（表 1）を考えると、リアリティショックが起こる①職場の理想と現実との乖離、多くの技術を早期に習得しなければならない②自身の技術の未熟や技術の習得困難感、技術が早期に習得できないことからの③自信喪失や先輩看護師との関係性が悪化、ストレスが及ぼす④心身のバランス崩壊、自身の限界を感じた⑤早期離職へと経過しているように考えられる。

ここで、早期離職する新人看護職員と早期離職をしない新人看護職員の比較研究として、塚本[9)]は、退職者・継続者に共通する経験と独自の経験とに分類している。

① 共通経験

・看護・指導実見による現状批判と卓越性発見
・未熟さ露呈の予測による露呈回避の試み
・実践能力不足の自覚による就業継続困難
・支援要請・獲得による問題解決と獲得不可による解決困難
・支援内容比較による先輩看護師期待度向上への推察
・学生から社会人への移行による看護師としての援助提供への懸命努力
・経験累積、評価受け入れ反復による実践能力獲得

・職場内人間関係形成
②退職者独自の経験
・先輩看護師からの支援獲得による問題解決の不可
・理想の指導と現実の指導の乖離知覚による就業意欲の低下
・同僚・先輩看護師理解不可による関係形成悲観
・学生時代からの未解決問題保有による問題再燃
・期待される自己と現実自己の乖離知覚
・不十分さ改善不可による自己への失望
・過重労働継続による心身疲弊蓄積
・就業開始に伴う期待と落胆
・就業継続困難感知と就業継続断念
・次なる就業に向けての目標設定と目標達成への努力

③就業者独自の経験
・学習ニード充足による意欲向上
・効果実感不可による提供援助の適否検討
・失敗からの学びによる看護専門職としての厳しい自覚
・状況理解進展と理解進展による看護専門職者としての態度獲得
・実践能力向上の困難知覚
・肯定的評価の獲得による実践能力向上確信
・経験累積による効果的な役割遂行
・収入源確保の必要性自覚による就業継続意志補強

これまでに概観してきた 3 論文の考えられる心理過程①職場の理想と現実との乖離②自身の技術の未熟や技術の習得困難感③自信喪失や先輩看護師との関係性が悪化④心身のバランス崩壊⑤早期離職と、塚本の退職者・継続者に共通する経験と独自の経験とに分類とを比較すると、就業継続者にはない項目として、先輩看護師との関係性の悪化と心身バランス崩壊であることがわかる。すなわち、新人看護職員の心理過程として、新人看護職員と先輩看護職員との関係性の悪化を経て心身バランス崩壊が早期離職を決意するサインなのではないだろうか。

表 1. 離職心理過程の分類の共通性

心理過程の分類の共通性	「就職後 1 年以内に退職を決断した看護師の退職に至るまでの心理変化の一考察」	「看護大学を卒業した看護師の入職早期離職体験」	「早期退職した病院勤務の新卒看護師の入職から退職後までの心理的プロセス」
①職場の理想と現実との乖離	①自分の思っていた看護と実際との違いを知る	①病棟の雰囲気を敏感に感じながら仕事をする	①現実の世界への戸惑い
②自身の技術の未熟や技術の習得困難感	②自分で必死に努力する	②一人の先輩にいじめられる ③習ったことを 1 度でできない	②どうしたらよいのかわからない ③看護師としての模索
③自信喪失や先輩看護師との関係性が悪化	③すべてがうまくいかないと感じる	④患者の前で先輩看護師に怒鳴られる ⑤「やる気がない」と言われ、「ちゃんとしなきゃいけない」と気負う	④自己への失望 ⑤心の調整 ⑥仕事のミスをした自己価値のゆらぎ ⑦看護師としての自己のあり方を自問
④心身のバランス崩壊		⑥極度の不眠などの身体症状 ⑦不眠・集中力の低下・間違えが増える・先輩たちに怒られるという悪循環 ⑧先輩に相談を持ちかけても話を切られ、答えが得られない ⑨辞めないで頑張り続ければという意識しか全くなく、ひたすら頑張る	⑧心身のバランスの崩壊
⑤早期離職	④仕事に興味がなくなる	⑩ミスをし、自分が患者に危害を加えてしまう看護師になっていると気付く ⑪カウンセリングを受ける	⑨退職決断の引き金 ⑩退職の決断

2.5 早期離職した新人看護職員の心理過程からみる就業場所の学習方法

早期離職に至るまでの心理過程が描かれている 3 論文「就職後 1 年以内に退職を決断した看護師の退職に至るまでの心理変化の一考察」「看護大学を卒業した看護師の入職早期離職体験」「早期退職した病院勤務の新卒看護師の入職から退職後までの心理的プロセス」の心理過程から見て取れる学習理論として、臨床の現場では常に先輩看護職員が新人看護職員へ指導するという教育体制が取られているため、認知的徒弟制（Cognitive Apprenticeship）が考えられる。

認知的徒弟制[10]とは、親方（熟達者）と弟子（学習者）の間で古くから行われてきた徒弟制の職業技術訓練から、その学習プロセスを認知的な観点から 4 段階に理論化したものである。この 4 段階のステップを踏むことで、効果的かつ効率的に知識・技能の修得・継承ができると考えられている。

①モデリング（modeling）：熟達者が学習者に模範を示し、学習者はそれを観察して視覚的に把握する。

②コーチング（coaching）：熟達者が学習者のレベルに合った課題を与え、助言を与えながら模範の通りにできるよう指導する。

③スキャフォールディング（scaffolding）：学習者が自分自身でさらに上達できるための支援を行う。

④フェーディング（fading）：熟達者は学習者が独り立ちできるように少しずつ関わりを減らし、退いていく。

これらの認知的徒弟制は、多くの場所で行われて効果がみられている。しかし、先に述べた新人看護職員の早期離職に繋がる問題の段階場所として考えられるのは、②コーチングの段階である。この段階がうまくいかず、時間を要することで先輩看護師との関係性が悪化し、新人看護職員の心身バランスを崩壊させる原因となっているとこが考えられる。では、何故時間を要することができないかというと、新人看護職員といえども患者の前では 1 人の看護職員として、先輩看護職員と同じ看護を提供されることが求められる。②コーチングの段階が進まないことによる先輩看護職員の焦りが新人看護職員を追い詰め、追い詰められた新人看護職員は更に「できない自分」を責めて、心身バランスを崩壊させていくのではないだろうか。

3.新人看護職員の今後の就業

厚生労働省が 2010 年 8 月～2011 年 1 月までに「看護職員就業状況等実態調査」[11]を行っている。調査方法として、各都道府県を通じて看護師等学校養成所に協力を依頼し、卒業生に対して質問紙調査を実施している。調査対象数 39.134 名、回収数 20.466 名（回収率 52.3%）、有効回答数 20.388 名（有効回答率 52.1%）である。

看護職員の離職理由（有効回答数 11.999 名）の主な理由 3 つまでを選択してもらうと、「出産・育児のため」（22.1%）が最も多く、「その他」（19.7%）、「結婚のため」(17.7%)、「他施設への興味」(15.1%)と続いていた。しかし、これらは看護職員全体の離職理由であり、新人看護職員の離職理由がそのまま反映されているわけではない。そこで、看護職員としての通算就業年数別、今後の就業希望（有効回答数 3.004 名）をみてみると、1 年未満（有効回答数 149 名）の看護職員として働きたい 22.8%、看護職員以外として働きたい 49.7%、就職希望なし 16.8%、未定 8.1%、無回答 2.7%となっていた。これらの結果は、新人看護職員の早期離職心理過程で①職場の理想と現実との乖離②自身の技術の未熟や技術の習得困難感③自信喪失や先輩看護師との関係性が悪化④心身のバランス崩壊⑤早期離職に至っているため、看護職への失望や他職種への適職期待から、看護職員への復職希望が少ないのではないだろうか。

厚生労働省は「復職支援」「離職防止・定着促進」に取り組んでいるが、この看護職員以外として働きたい 49.7%、就職希望なし 16.8%、未定 8.1%、無回答 2.7%をどのように復職に向かわせるかということが課題だろう。

4.若年者の離職状況と新人看護職員との離職理由比較

新人看護職員といえども、他の職種に就労している若年者と同じ就労 1 年目の立場にある。しかし、人の生死に直結する仕事であり、1 年目であろうと先輩看護職員と同じレベルの知識と技術を要求されるのである。では、この特殊な環境に置かれている新人看護職員の離職理由は、他の職種に就労してい

る若年者の離職理由と異なるのであろうか。

独立行政法人労働政策研究・研修機構が 2016 年 2 月～3 月に「若年者の能力開発と職場への定着に関する調査」[12]を行い、その調査方法はＷｅｂモニター調査で、登録されている年齢（2016 年 4 月 2 日時点）が 21 歳～33 歳の人に調査している。離職理由についての回答者は 2.209 名だが、初めての就業で 3 年以内に離職した者が対象になっている。

離職理由（表 2）として、男女では離職理由は殆ど同じで、異なる点は男性の 10 位希望条件に合った仕事が見つかったと、女性の 4 位結婚・出産である。

若年者と新人看護職員との離職理由を比較すると、若年者は新卒 3 年以内離職者で、新人看護職員は 1 年未満という条件は違うが、新人看護職員の心理的経過を若年者の離職理由に当てはめると、「仕事がうまくできず自信を失った」という理由は男性 5 位、女性 6 位、「肉体的・精神的健康を損ねた」は男性 2 位、女性 1 位であり、「人間関係が良くなかった」は男性 4 位、女性 3 位で上位の離職理由に挙げられている。すなわち、新人看護職員の早期離職理由は看護だけの特徴ではないということになる。しかし、男女ともに「仕事がうまくできず自信を失った」よりも「肉体的・精神的健康を損ねた」や「人間関係が良くなかった」という離職理由が上位に上がっていることは、離職を決断する大きな転機は、やはり新人看護職員の心理過程から考えると、自身の技術の未熟や技術の習得困難感の時期ではなく、新人看護職員と先輩看護職員との関係性の悪化を経て心身バランス崩壊の時期なのだろう。故に、新人看護職員と先輩看護職員との関係性の悪化、心身バランス崩壊の時期までに早期離職が思い留まれるように、支援する必要性がある。支援方法として、以前よりよく取り組まれているのは、知識と技術を習得できる看護職員になるための指導方法[13]である。しかし、新人看護職員の離職理由が人間関係の悪化という結果から、よい人間関係を築く対策も進めていく必要があるのだろう。

表 2.「初めての正社員勤務先」を離職した理由

男性		
順位	理由	%
1	労働時間・休日・休暇の条件	34.0
2	自分がやりたい仕事とは異なる	29.9
2	肉体的・精神的健康を損ねた	29.9
4	人間関係が良くなかった	27.5
5	仕事がうまくできず自信を失った	26.4
6	賃金の条件	24.3
7	キャリアアップ	22.5
8	会社に将来性がない	19.4
9	ノルマや責任が重すぎた	17.1
10	希望条件に合った仕事が見つかった	16.0
女性		
順位	理由	%
1	肉体的・精神的健康を損ねた	34.3
2	労働時間・休日・休暇の条件	33.2
3	人間関係が良くなかった	29.7
4	結婚・出産	25.8
5	自分がやりたい仕事とは異なる	23.4
6	仕事がうまくできず自信を失った	22.3
7	ノルマや責任が重すぎた	19.1
8	賃金の条件	18.7
9	会社に将来性がない	15.3
10	キャリアアップ	12.4

出典：独立行政法人労働政策研究・研修機構,「若年者の能力開発と職場への定着に関する調査」一部データ加工,
http://www.jil.go.jp/institute/research/2017/documents/164_05.pdf, 2018/8/20.

4.おわりに

看護師等養成所を卒業した就労 1 年未満の早期離職をした新人看護職員を研究対象に文献検討を行い、早期離職に至るまでの心理の特徴を考察してきたが、早期離職の心理過程として①職場の理想と現実との乖離②自身の技術の未熟や技術の習得困難感③自信喪失や先輩看護師との関係性が悪化④心身のバラン

ス崩壊⑤早期離職へと経過しているように考えられた。また、早期離職をしていた新人看護職員は、就業場所の学習理論である認知的徒弟制の第 2 段階コーチングが進まず、先輩看護師との関係性が悪化し、新人看護職員の心身バランスを崩壊させていることも考えられた。そして離職した新人看護職員は看護職への復職を希望しない者が多く、看護職員確保の難しさが明らかになった。しかし、その早期離職理由は看護に限らず、若年者にも共通するものであり、新人看護職員の特徴ではないことが示唆されたが、若年者の離職理由の「仕事がうまくできず自信を失った」よりも「肉体的・精神的健康を損ねた」や「人間関係が良くなかった」という離職理由が上位に上がっていることは、離職を決断する大きな転機は、やはり新人看護職員の心理過程から考えると、自身の技術の未熟や技術の習得困難感の時期ではなく、新人看護職員と先輩看護職員との関係性の悪化を経て心身バランス崩壊の時期なのだろう。

引用・参考文献

[1] 厚生労働省:新人看護職員研修ガイドライン, http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000049466_1.pdf, 2017/5/25.
[2] 公益社団法人日本看護協会:2016 年病院看護実態調査, https://www.nurse.or.jp/up_pdf/20170404155837_f.pdf#search=%272016%E5%B9%B4%E7%97%85%E9%99%A2%E7%9C%8B%E8%AD%B7%E5%AE%9F%E6%85%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB%27, 2017/5/25.
[3] 下田真梨子:看護師の離職に関する文献検討, 高知大学看護学会誌, 8(1), 2014, p29-38.
[4] 内野恵子・島田涼子:本邦における新人看護師の離職についての文献研究, 心身健康科学, 11(1), 2015, p18-23.
[5] 片桐麻希・坂江千寿子:新卒看護師の離職理由と就業継続に必要とされる支援内容に関する文献検索, 佐久大学看護研究雑誌, 8(1), 2016, p49-59.
[6] 橋本結花:就職後 1 年以内に退職を決断した看護師の退職に至るまでの心理変化の一考察, 看護保健科学研究, 3(1), 2003, p105-110.
[7] 菊岡祥子:看護大学を卒業した看護師の入職早期離職体験, 日本赤十字看護大学紀要, 21, 2007, p73-81.
[8] 山田貴子・藤内美保:早期退職した病院勤務の新卒看護師の入職から退職後までの心理的プロセス, 日本看護研究学会雑誌, 38(5), 2015, p41-51.
[9] 塚本友栄・舟島なをみ:就職後早期に退職した新人看護師の経験に関する研究, 看護教育学研究, 17(1), 2008, p22-35.
[10] HR プロ:認知的徒弟制, 用語集, https://www.hrpro.co.jp/glossary_detail.php?id=126, 2018/8/20.
[11] 厚生労働省:看護職員就業状況等実態調査, https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000017cjh.html, 2018/8/20.
[12] 独立行政法人労働政策研究・研修機構:若年者の能力開発と職場への定着に関する調査, 若年者の離職状況と離職後のキャリア形成, http://www.jil.go.jp/institute/research/2017/documents/164_05.pdf, 2018/8/20.
[13] 厚生労働省:新人看護職員研修ガイドライン, http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000049466_1.pdf, 2017/5/25.

日本国際情報学会誌規程

日本国際情報学会誌規程

第１条　（目　的）

１　日本国際情報学会（英文名：Japanese Society for Global Social and Cultural Studies、以下「学会」という）は、学会の活動成果の発表を目的に日本国際情報学会誌『国際情報研究』（英文名：The Journal of Japanese Society for Global Social and Cultural Studies、以下「学会誌」という）を発行する。

第２条　（編集委員会）

１　学会誌の企画、原稿の募集（依頼）及び編集のために編集委員会を置く。

２　編集委員会は，編集委員長，編集副委員長各 1 名，および編集委員若干名によって構成される。

３　編集委員長は，会長、副会長、理事の中より理事会が選任する。

４　編集副委員長は，編集委員長が会員の中より推薦し、理事会が選任する。

５　編集委員は，編集委員長が会員の中より推薦し、理事会の承認を得るものとする。

第３条　（執筆者の資格）

１　執筆の資格を有する者は次の各号に掲げる者とし、執筆は公募及び依頼とする。

(1) 会員
(2) 会員を筆頭執筆者とする共同執筆者

２　前項各号に掲げる者以外の者から執筆の申し出があった場合には、編集委員会はこれを承認することがある。

３　会費未納者については執筆資格を停止する。

第４条　（原稿の要件）

１　学会誌に執筆する原稿の要件は、次の各号のとおりとする。

(1) 未発表の原稿であること。
(2) 完成原稿であること。

(3)　原稿の種類は、次のいずれかに該当するものであること。

① 研究論文　（審査論文：Original）
② 報告論文　（自由投稿論文：Review、研究ノート：Research Report）
③ 書評　　（Book　Review）
③ その他編集委員会が認めたもの

(4)　論文の原稿は、表、図、写真を含め１２ページ以内とすること。研究ノートその他は特に形式は定めないが、論文に準拠することが望ましく、 またそのまま掲載できる完全原稿とし、400 字原稿用紙で 20 枚以内とする。ただし、編集委員会が、特別の事由を認めたときはこの限りではない
(5) グラフを含む表、図、写真は、そのまま製版できるように作成すること。
(6) 原稿の使用言語は、印刷可能な言語の範囲内とすること。

２　年度における投稿は、研究論文、報告論文、及び書評で各 2 稿以内、または合計 3 稿までとする。ただし共同執筆は、この数に含まない。

第 5 条　(原稿の採択)

１　執筆原稿が学会の主旨及び第 4 条・第 7 条に規定する原稿の要件・形式に合致しないとみとめられる場合には、不採用とする。また不採用になった原稿の執筆者は、結果に対する異議申し立てをできないものとする。

２　投稿原稿の採否は、以下の(1)から(5)の細則に従い、各分野の専門家（レフェリー）に投稿原稿の審査を依頼し、その意見をもとに編集委員会で審議し、決定する。

(1)　投稿原稿は、まず編集委員会において、その内容について第一次審査を行う。

(2)　第一次審査にパスした原稿は、匿名でレフェリーに送られ、審査を受ける。
レフェリーからの審査意見は、編集委員長に伝達される。

(3)　投稿原稿は、レフェリーの審査意見をもとに編集委員会で審議し、採否を最終決定する。

(4)　審査にあたる、レフェリーの名前は公表しない。

(5)　編集委員会の判断により原稿執筆者に、内容変更の依頼を行うことがある。

第 6 条　(学会誌の発行)

１　学会誌は、各年度１回発行することとし、各年度の原稿募集（依頼）・執筆期限・発行期日等は、編集委員会が決定し、公表する。

第 7 条　（論文原稿の形式）

1　学会誌に執筆する論文原稿の形式は、編集委員会が別に定める「日本国際情報学会誌執筆要領」によるものとする。ただし、「日本国際情報学会誌執筆要領」ではその論文の真価を表現できないと編集委員長が認めた場合は、別途編集委員会が定めた形式による。

第 8 条　（論文等の転載）

1　学会誌に掲載された論文の転載は、その学会誌発行後半年を経過していない場合は、編集委員会と協議し、承諾を得るものとする。

2　転載論文等には、学会誌に初出した旨を付記するものとする。

第 9 条　（校　正）

1　校正は著者校正とし、校正期限を遵守し、校正時に大幅な訂正を行わないこととする。

2　前項の規定に反し、執筆者が校正時に大幅な訂正を行い、学会誌の発行に重大な支障をきたすおそれがある場合には、第 5 条第 1 項の規定を準用する。

第 10 条　（原稿料）

1　原稿料は、会員以外の者への依頼原稿を除き、無料とする。

第 11 条　（改　廃）

1　この規程の改廃は、編集委員会の議を経て、理事会が行う。

附　則

この規程は、平成 17 年 5 月 1 日から施行する。
平成 17 年 5 月　第 5 条を改定する。
平成 21 年 12 月 第 1 条を改定する。
平成 22 年 6 月 第 4 条、第 5 条を改定する。
平成 23 年 8 月 第 3 条 2 項、第 4 条 2 項を追加する。

初回　平成 15 年 8 月 30 日理事会決定
第 4 回改定　平成 23 年 8 月 8 日理事会決定

編集後記

平成 30 年度は、12 月 8 日、横浜商科大学で開催された日本国際情報学会大会・総会も無事に終了し、『国際情報研究』通巻第 15 号の発行を残すのみとなりました。

今回の本誌で採用された投稿テーマは多様性にとんでおり、まさに「多様性（ダイバーシティ）への挑戦」といえるでしょう。『国際情報研究』では、これまで、この社会で見過ごされたり対応がおざなり・後回しにされたりしていたこれらの課題を顕在化させる壮大な社会実験の場として大いに期待していただきたいと存じます。

さいごに本誌編集に携わっていただいた投稿者や編集委員を関係部門の皆々さまに厚く御礼申し上げます。

編集委員会　委員長 佐々木 健
委　員 加藤 香須美
委　員 川原 有加
委　員 立石 佳代
委　員 坊農 豊彦
委　員 増子 保志
委　員 村上 恒夫

『国際情報研究』第 15 号(15 巻 1 号) 2018 年度 日本国際情報学会誌

2018 年 12 月 23 発行 領価 2,000 円（CD 配布・送料込み）

発 行 日本国際情報学会
静岡県静岡市駿河区谷田 52-1
静岡県立大学国際関係学部
諏訪一幸研究室
TEL 04-2996-4160
FAX 04-2996-4163
URL http://gscs.jp/

編 集 日本国際情報学会 編集委員会

無断転載を禁ず